

金毘羅參詣名所圖會二





金毘羅泰詣名所圖會卷之二

目錄

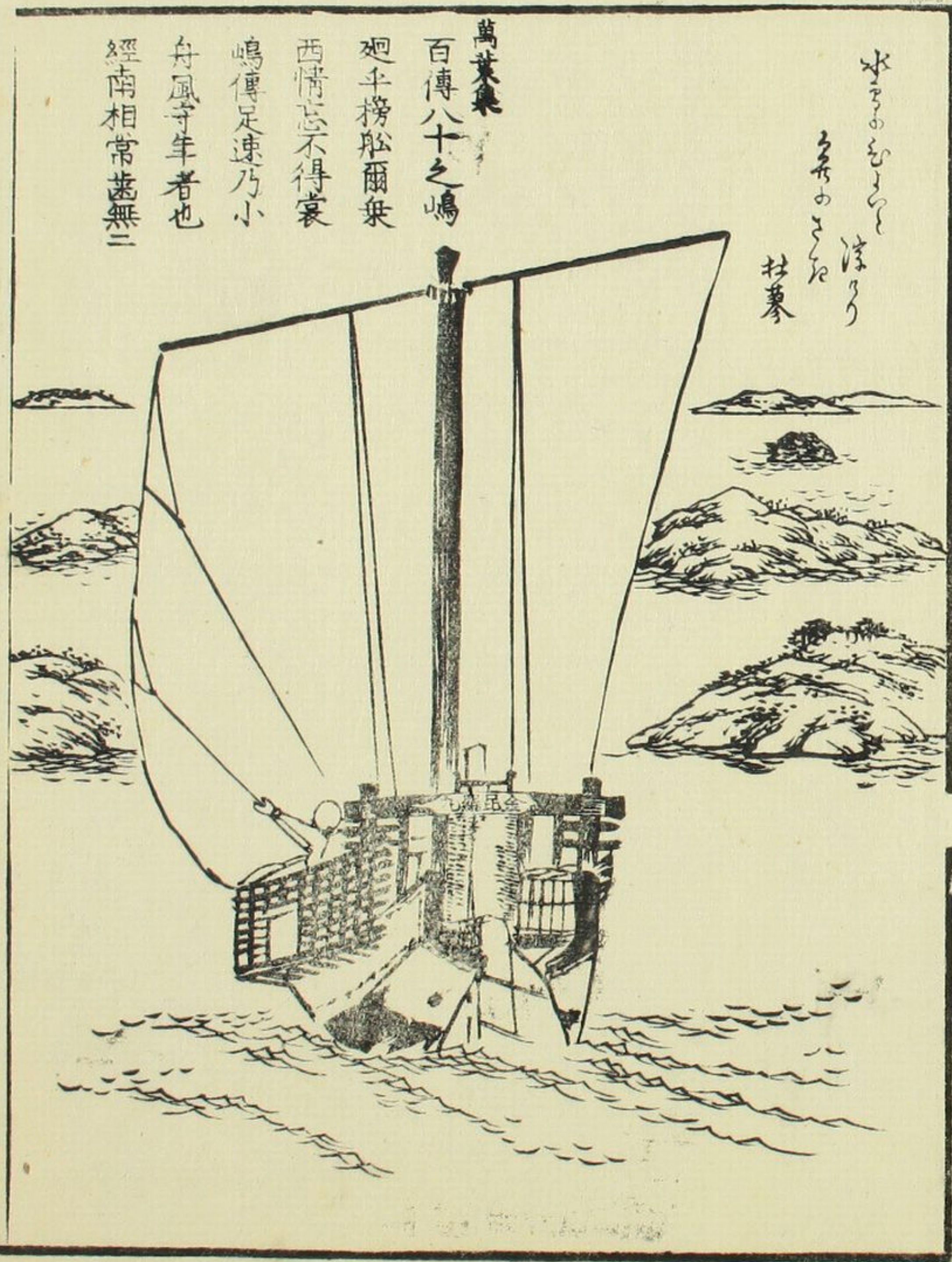
金毘羅渡海の圖	圓龜鎮城川口	大龜海上行む話	井上通女の傳
通女盤柱小對話の圖	中府口二軒家	金毘羅伊豫の分道	山北八幡宮
田村の池	拵魚の神社	西行の本松	郡家八幡宮
神野の神社	武智方次郎の墓	与北の茶堂	公文の茶堂
富熊の神社	櫛梨の神社	大歳の神社	石井の神社
横瀬領分の境	櫻の馬場	紫銅鳥居	靈驗石
松櫻の大樹	榎井新町	一之鳥居	鞘橋
石淵	萬農の池	萬農池の神社	十市の池
打越坂	内町旅駕屋	一之坂	名産館店

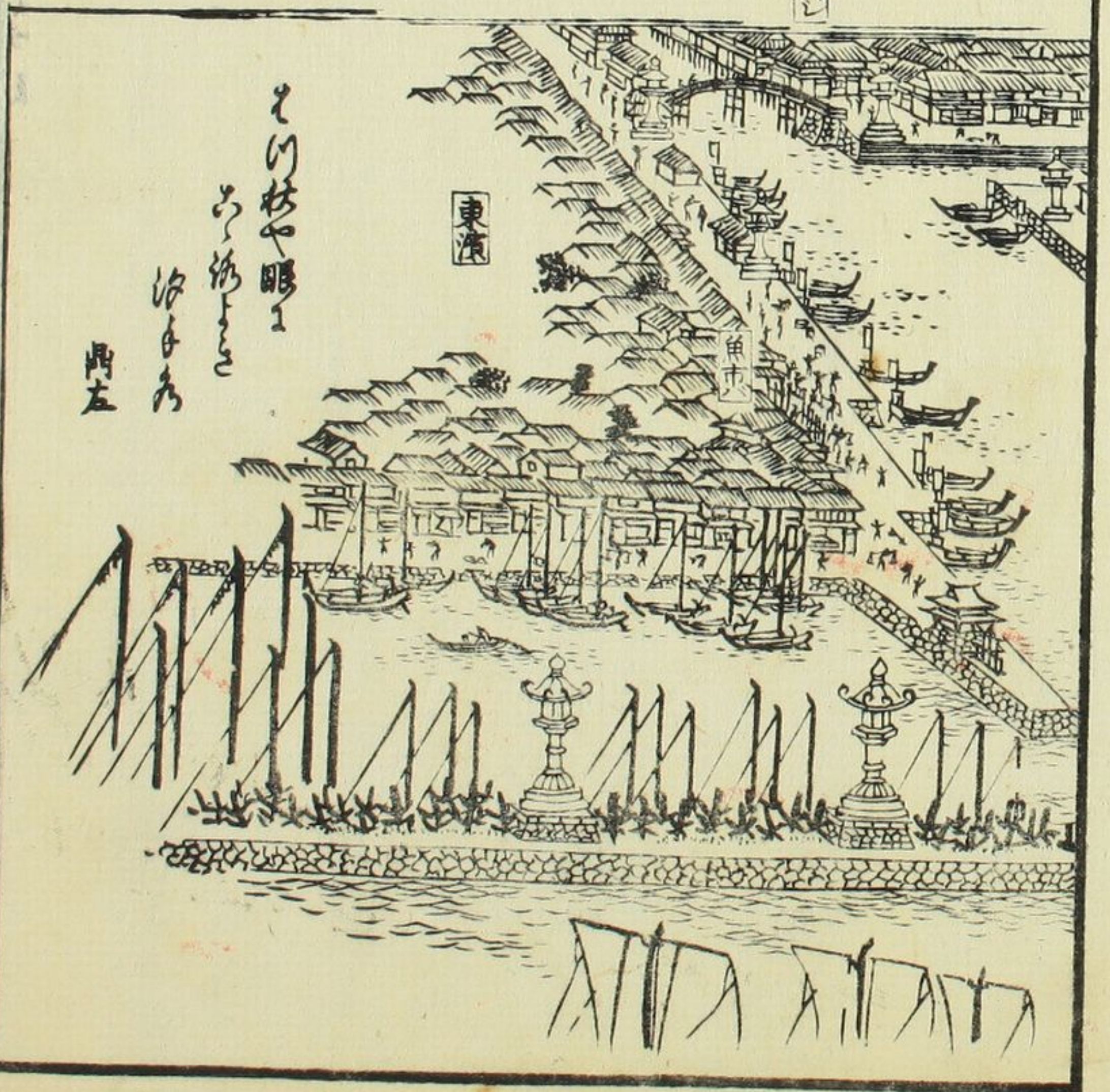
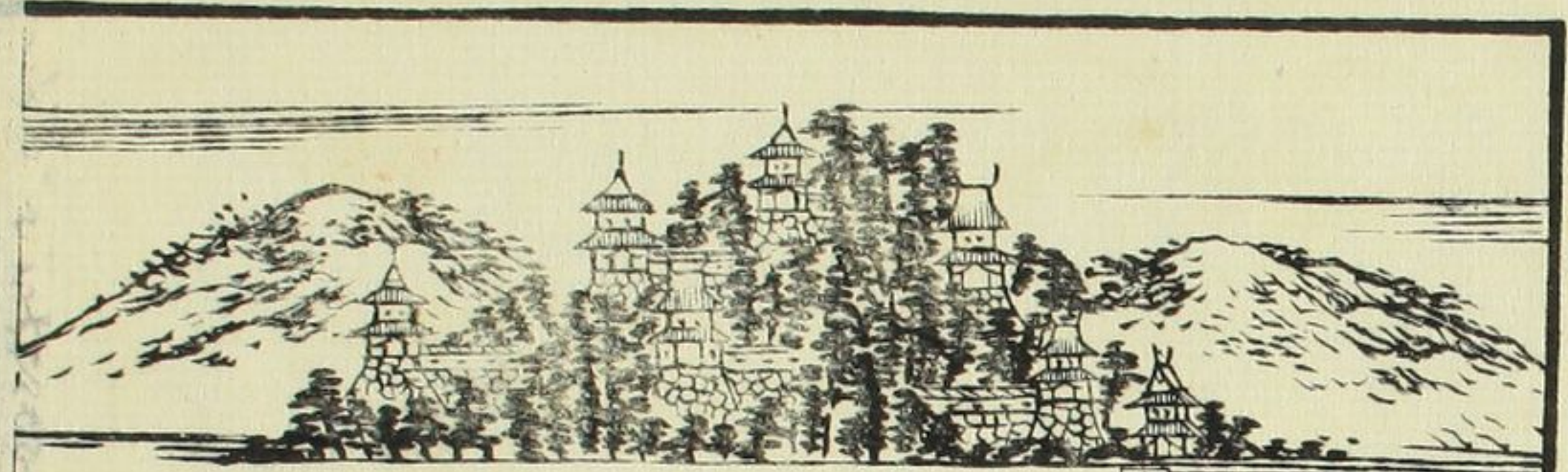


愛宕町	天神社	愛宕山	箸洗の池
清少納言之墳	同石碑	清女夢中ノ意趣と告る圖	
普門院	二王門	櫻の馬場	真光院
萬福院	尊勝院	神護院	竹園
別業幽軒	本坊金光院	神馬堂	茶堂
愛宕山遙拜所	多寶塔	萬燈堂	大野口
古帳菴の碑	二天門 鐘樓	本地堂	行者堂
大行司堂	紫銅鳥居	御本社	拜殿
二十番神社	社頭より眺望の圖	經藏	紫銅之碑
觀音堂	後堂金剛坊	繪馬堂	阿弥陀堂
孔雀明王堂	籠所	觀音坂	蓮池

金二ノ目ノ

金堂	例祭神支行列の圖	學泉寺	諸道行程
大麻の神社	古作両命の圖	五岳山善通寺	金堂
五重大塔	鐘樓 鼓樓	常行堂	觀喜天祠
五社明神社	天神社	經藏	善女龍王社
南大門	法然上人の塔	足利尊氏郷の塔	楠大樹
觀智院觀音堂	花成坊	院王坊藥師堂	奥院御影堂
親寫堂	十王堂	茶堂 鐘樓	二王門
護摩堂	御成門	本坊	邀月亭
道範阿蘭陀の塔	佐伯八幡宮	使鬼神額と忍の圖	獨鈷水
御手洗の水	香色山	四方護荒神祠	六地蔵
火上山	中山	御影の池	我拜師山





その林や野  
 の水も  
 西五

東漢

讃州圓亀鎮城川口船場

東山八景

船場の舟

舟

舟

舟

蕃教

無数輕帆筆海

天春風影映港

門相隨潮歸去

隨潮到多夏象

山香客船

金陵

北山  
 行宮

西濱

金二一

金毘羅奉詣名所圖會卷之二

圓龜湊

讃岐国北の海濱あり大坂より海陸ともに行程凡五十余里下津井凡五里  
 當津ハ幾内條より南海道往返の喉ハあり也象頭山の奉詣大師靈場ハ  
 遍路其餘南海小到る乃旅客撰測浪ハ津より乗船の渡言も更なり陸  
 路と下向の車も或田の早村より渡り又下津井より船も何れも此方より岸  
 せりと言事区され東雲の頃より追々浪花より此船向い路より船引  
 もきび黄昏時より向い路の渡海登船の出帆有て船宿懸ひ昼夜に分  
 濱辺の藏々ハ俵物の水揚屋物積送の渡中仲仕の掛声船子の呼声雷々湊  
 々、縦横小石の波々何れも紫銅の大燈籠夜陸照監船所の嚴重濱々の石  
 燈籠魚市の群集御城正面は山岳巍々として敬篤悟々内町ハ市鄣軒  
 ともども交易小舟もかく就中籠の細務濃團圓座もどろ物々として鬻

家多々旅客かゝるに需めて家土産とするもの街の蟹菜実小當國第一乃湊  
 と言ふ也 城下の封後寺院神社の類ハ後備あり著ハセにに渡

周田耕筆、守與和尚が結云

備前の下津系より船して丸龜へ渡る海上丸龜通くありてさるるむらひ又入り  
 ありて丸龜標もさるる深きとありて長良木とありて船もあつたり  
 とも怪しくて船がさるるれい船がさるるれい大龜の首を出しさるる  
 空雲よみ海長閑なる日ハか首を出しつらひい今もあつてもんは首より木小二  
 龜さるるて入るるハ廿年とさるるも何れもさるるもさるるもさるるの  
 何れもさるるも丸龜といふ付くはさるるもさるるもさるるもさるるの

井上通女

丸龜の藩中井上何某の息女元録中の人あり

傳云通女、讃岐國圓龜言極彦の家臣井上儀左衛門某の女なり生質  
 幼雅も慧敏して書讀待賦兼和歌通雅才を以て世に聞かす  
 上女子の才藻あつて而して貞正通女の如き者字に觀る所あり十五歲時



五雲散人  
通女の紀ゆ  
後とる詞

唐山之孺子  
善唐待皇味  
之州女善和歌蓋  
國風之行使然而  
不足為奇者也近  
世處女巧歌兼得  
待法者其惟通子  
歟



井上通女  
通女系極彦の藩士井上何某の  
慶子とて知りて書し待  
歎も一人猶もる身より  
十上某の時君に依て其式  
く世道の紀と東海紀行名  
了天和二年とわれ  
冬羊の流乃生れらるる鑑  
掛禪師と佛と禪談ふ  
れ歎と縁とるもとる言  
象の表でとるもとる

其君の母の召不隨ひ東武小到つて侍山時の道の紀と東海紀行と号く  
其後九年と経て國小皈るの時の紀行と飯家日記といふ後田原清門  
つ士小嫁傳信内義勝といふ是候の侍候の儒はあり文芸論卷子  
初小と著は通女を著は所前二紀行の外小其家の集と和歌往事集と  
名く其氣象の秀ると言ひ盤柱禪師儒佛論と改れ味といふ小  
幸中道おとせとせといふのりおとせといふ船もこのまら

東海紀行

上界十六日のとらふに船よりね風をび〜〜と舟漕し  
あせせと浪をせりて舟船の心もなれぬ公事おとらぬ  
いざよひの月夜よりつとてむの〜〜とみえ〜〜と風を〜〜とひて  
凡ふの月夜よりつとてむの〜〜とみえ〜〜と風を〜〜とひて  
中畧〜〜とみえ〜〜と風を〜〜とひて

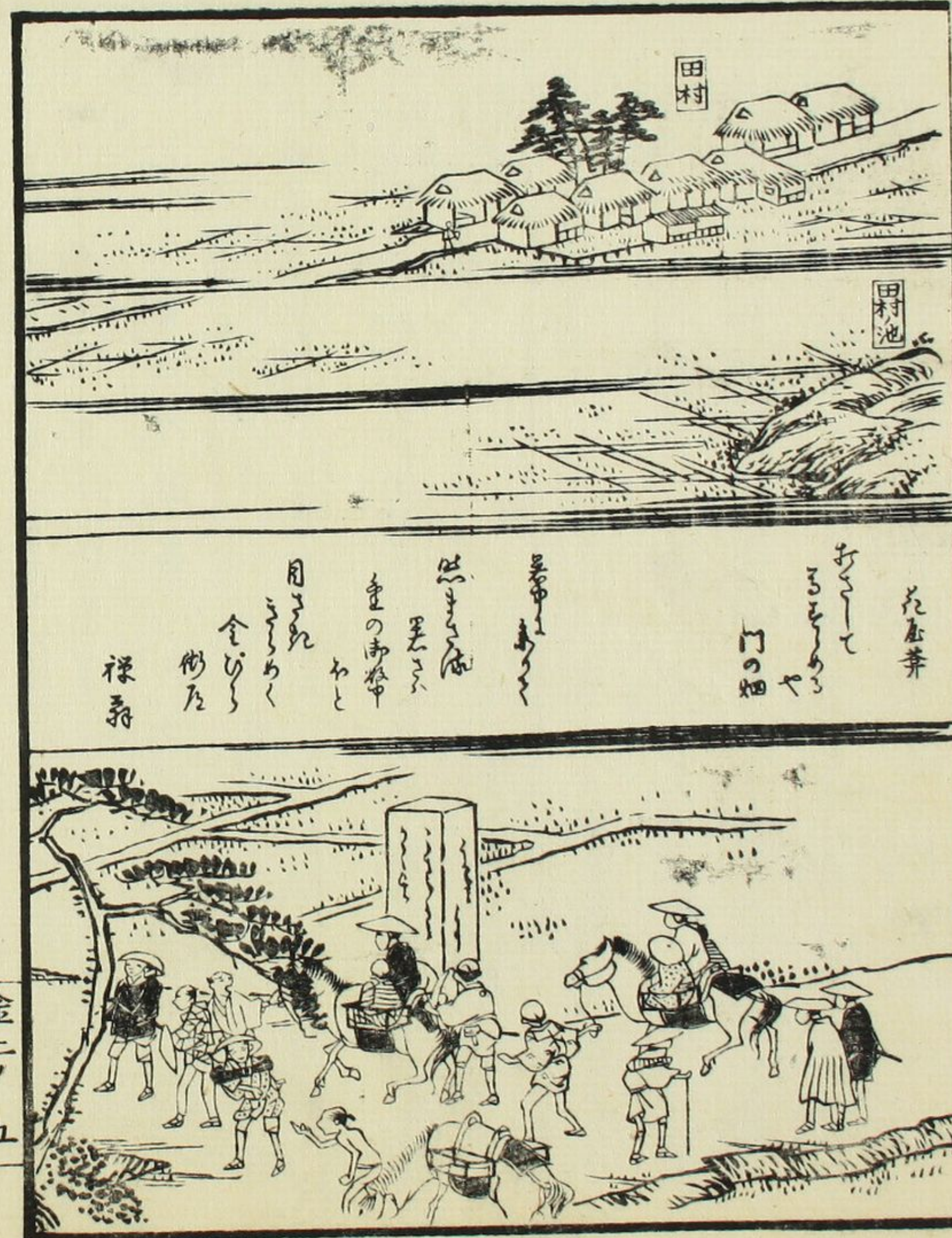
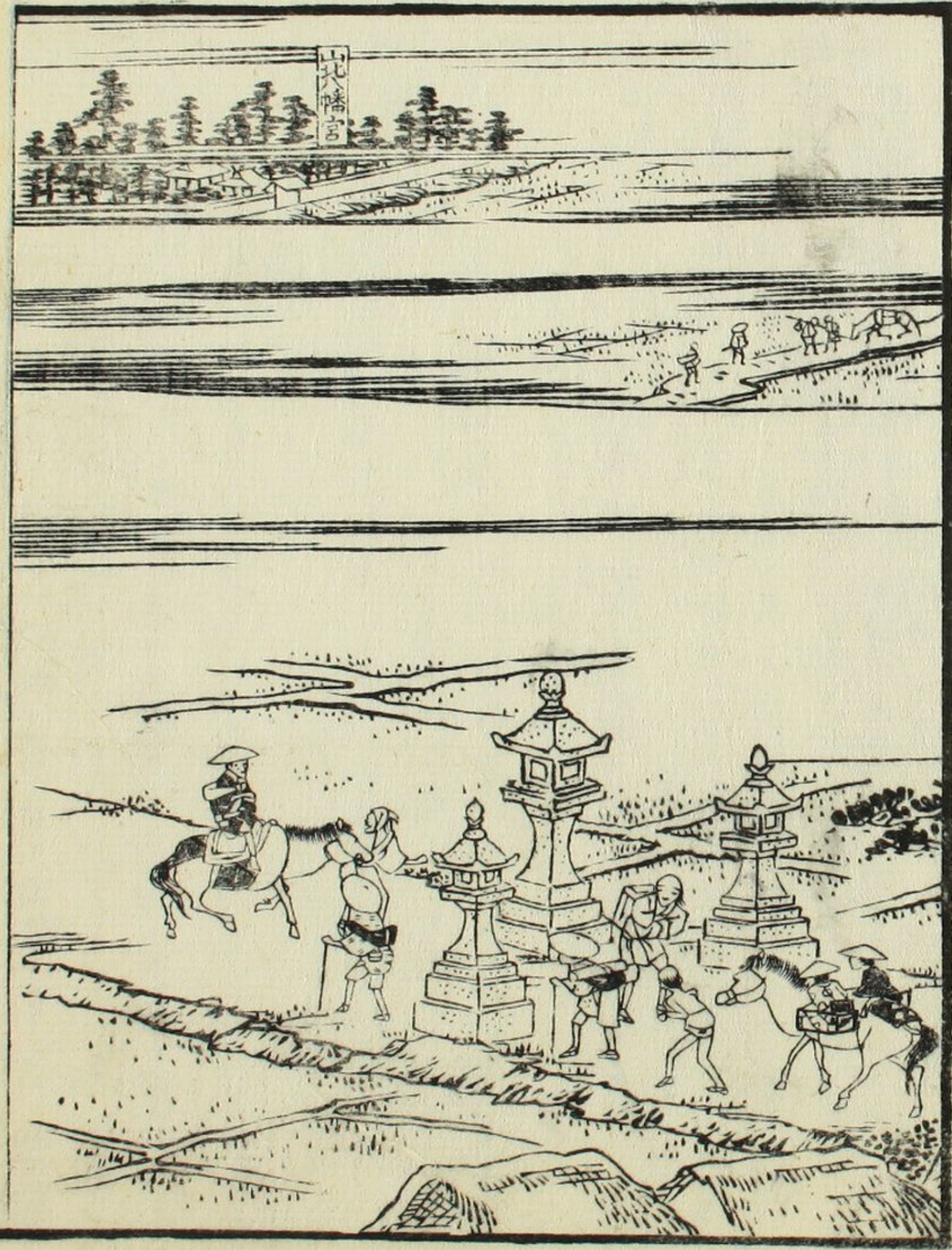
乘寒一葉浮 倏忽過他州 風響驚郷夢  
波聲動旅愁 蒼々天與水 浩々月如流

抚袖蓬窓裡 不能只自羞

中府口  
中府村  
三軒家

中府村の中より昔僅三軒のありが松葉を付入る人求軒と並り故き田  
名に〜〜と此所より道すたむらさきうたは松葉街とて名を  
者は〜〜と越きた金毘羅系緒の往還とて道標の石春柄は石燈籠の言也  
象頭山春坊の道中府より百五十二間、都て官道とて止て路徑廣く  
高低く老幼婦女も解がれ平地より其上傍の在郷より農夫阿そ馬引  
いで系緒の旅客と進めて乗しむ事とて荒神の擗〜〜と馬士頃〜  
い連て勇り形勢恰も保勢系宮の街道小彷彿〜〜





山北八幡宮

街道の左の方山の北村にあり、始に城山の北に有、故斯号せり、然るに後世今の地を遷、今の地は城山の南にあり、然るに山北と稱す、地名も山の北村とあり、志市中の生土神として、例年八月十五日福嶋の御嶽新、神輿渡御ありて最賑す。

田村池

田村郷中往還の右あり

柞原神社

往還の左柞原村にあり、村中の生土神と、高幡大明神と称す。

祭神一座

神功皇后

里俗傳て此神安産と守らせり、一隣村の婦人膝胎をんか、かゝる願をかくる、靈験新とあり

例祭 九月十八日

故に安産の神と称す

西行二本松

本社の後、今捨て其跡の、跡まゝ故事あり、や未詳

郡家八幡宮

郡家村にあり、村中の生土神と、往還の右の方の社にあり、例年九月十二日、国守象頭山、赤系詣の時、當神主の館に憩せり、結梅最も

神野神社

同村にあり、八幡を正向とす、往還の左にあり、土ノ皇子の社とあり

祭神一座

天穗日命

延喜式出郡珂郡二座の内あり、例祭 九月十五日

武智万次郎云者墓

郡家村入口道の傍にあり

天保三壬辰年九月二十八日

土人曰く、圓の武士復讐の、あゝ諸小と通歴、おと宿意と果、くくて終に此墓、痛死に故郷、詳るる、くくく、國守の、れれ、せ給ひ、ま埋て、標と、建を、せり、と

与北村

村中の中間、茶堂あり、村にあり、永代常持待り、金毘羅系詣の、後客を、小憩ふ、路の、右にあり

公文村

村中に茶堂ありて、持待の、街道の、左にあり、松ヶ端、公文村の、名あり

富熊神社

公文村の端の、山にあり、此所の、生土神と、祭神一座、吉備武茂命、土人富熊、明神と、稱す

櫛梨神社

西櫛梨村にあり、延喜式出郡珂郡二座の内、あり、祭神一座、神櫛王、景行紀に、玄神櫛梨皇子、は、是後、波園造之、始祖あり

大歳神社

東櫛梨村にあり、此所の、生土神と、祭神一座、飯津女命、往還の、右方に

石井神社

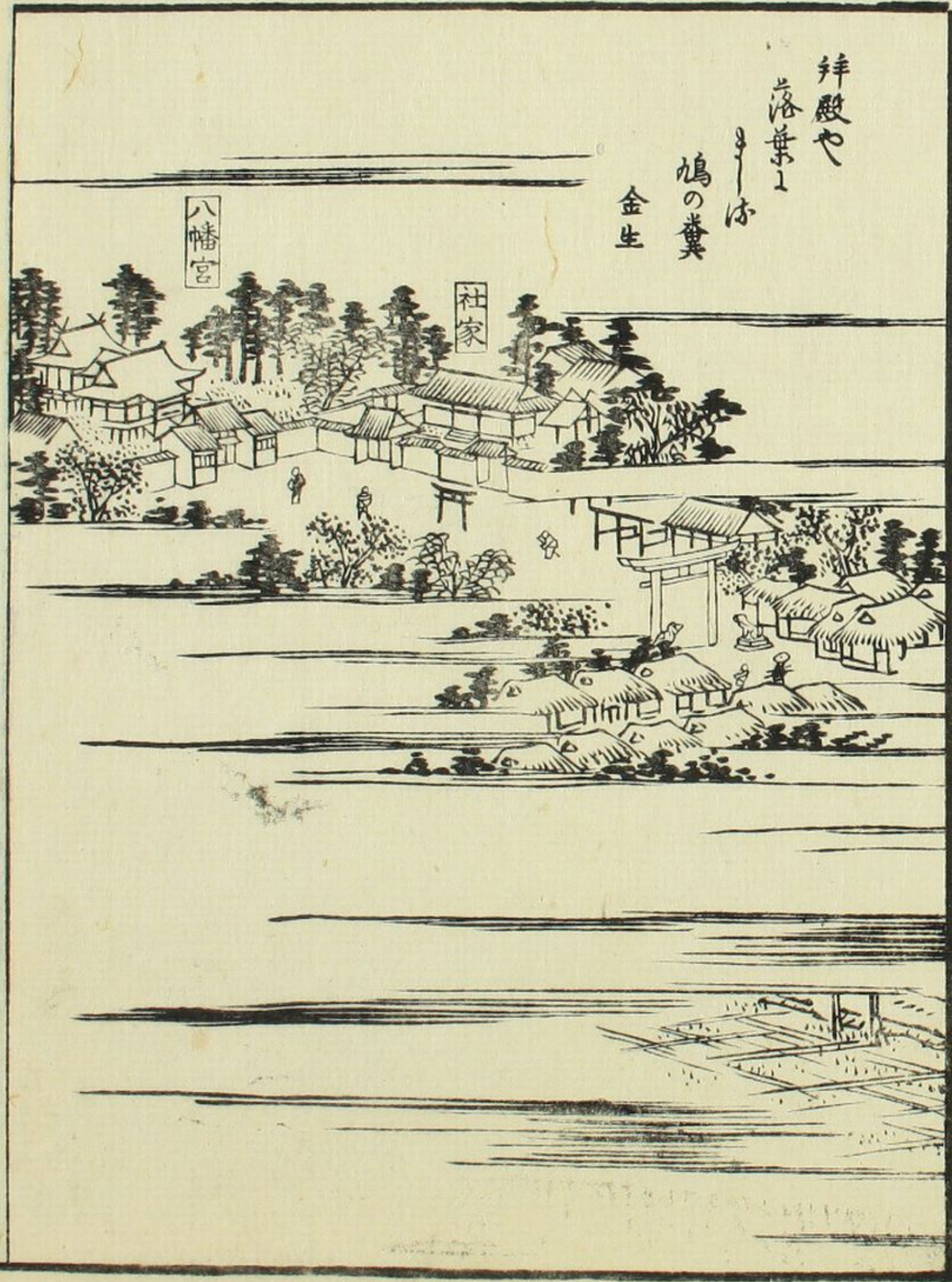
苗田村にあり、此所の、生土神と、祭神一座、應神天皇、往還の、右方に

横瀬村

村中に、領分界の、標石あり、此所より、金毘羅領あり

櫻馬場

左右、櫻の、並木あり、て、晩春の、頃、ハ爛熳と、して、風景あり



拜殿や  
落葉一  
鳩の糞  
金生

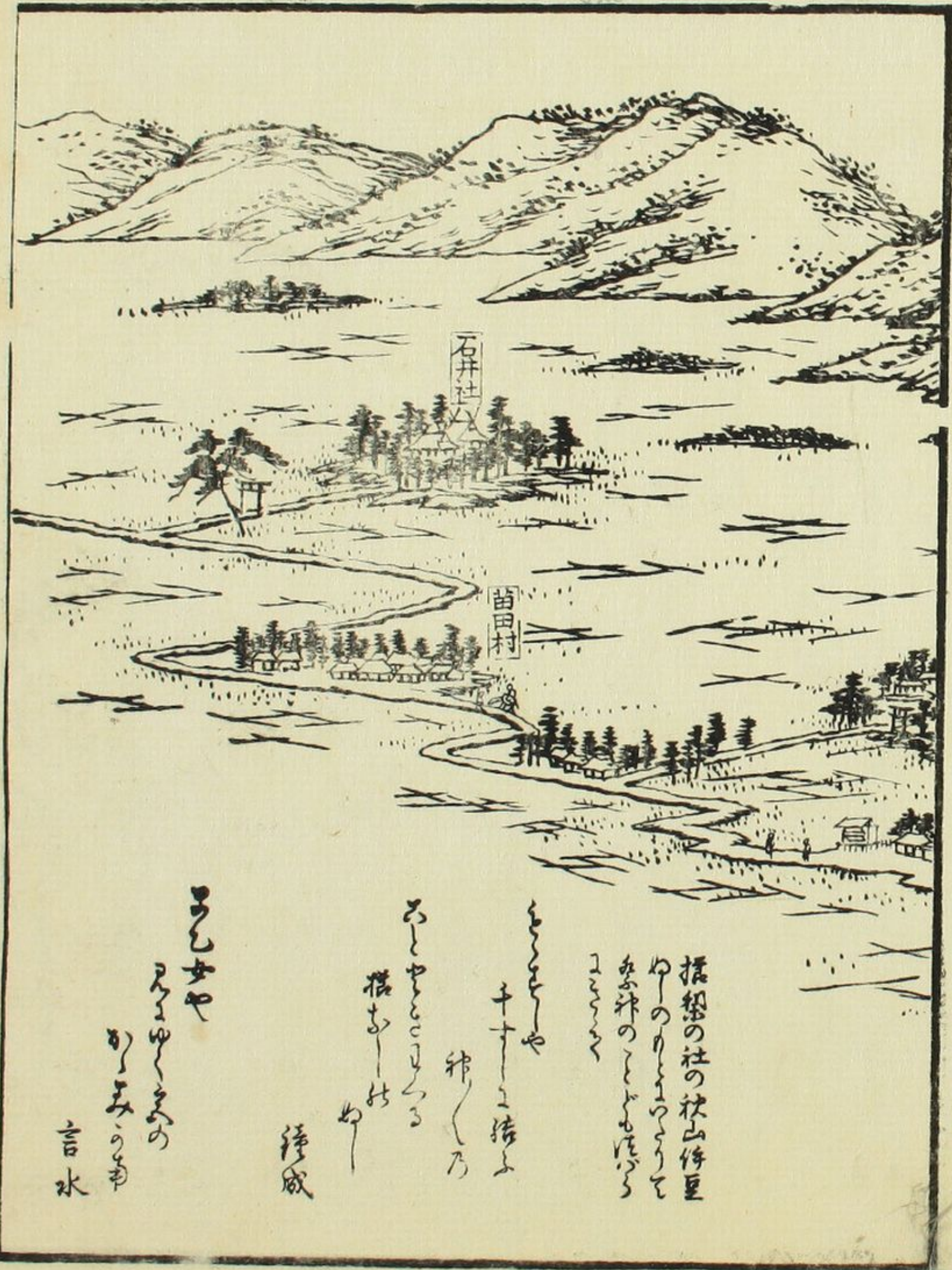
神野神社  
郡家八幡宮



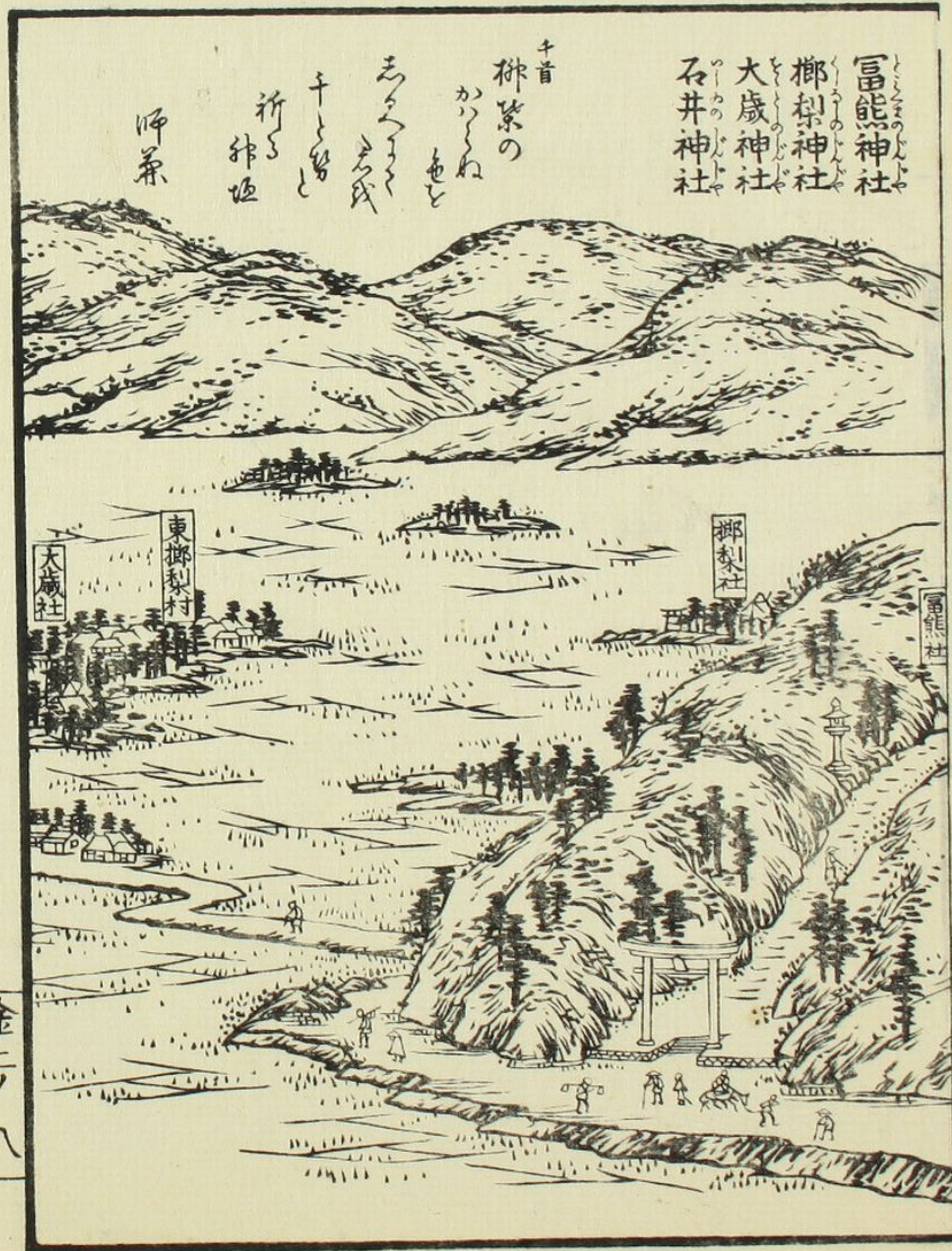
草庵集  
柳葉一  
鏡と  
むらさき  
つゝあ代は  
さくらん  
北門

神野神社

金二ノ七



石井社  
 苗田村  
 石井社の社林山侍屋  
 千手一徳小  
 神く乃  
 千手一徳小  
 神く乃  
 石井社の社林山侍屋  
 千手一徳小  
 神く乃



千首  
 柳梨の  
 大蔵神社  
 柳梨神社  
 富熊神社  
 石井神社  
 師兼  
 折子  
 折子  
 千手  
 千手  
 千手

金二ノ八

紫銅鳥居

東武の信者より奉納する所なり至つて廢木にして是事なり

靈驗石

鳥居の内右の傍より石面を十字の銘あり拾遺の記に委く

松櫻の大樹

鳥居の内右にあり象頭山八景の内にて二本樹の春風ふと影せり此所

榎井村

お宿程百五十丁の標あり

一の鳥居

石にて作る西にむくひての鳥居なり

鞘橋

東西かゝる長凡十二間より幅凡二間余屋上丸普なり

橋上は鮮魚青物類の店其食食用の品は道具古手物おの店ありてはて  
娘く東結阿波佳道にて阿波町と号し橋を渡りては長津津佳道を通  
寺通に金山寺町といふ十丁の長津津通にて内町といふ縁者あり

十二景之内 橋廊復道

人攀西嶽去 水向北溟流 風力權無運 始知不是舟

石

鞘橋の川上より例奉九月八日河川の御神慶此所より行り

象頭山八景

二本樹春風 好春

ふりやせはらの下風乃

長閑なり

いづこの人々  
く海をまよふ

官道霞横輕燕飛

兩株候樹弄春暉

暗影影微風度

萱徹往還香客衣

空航



十二景之内 石淵新浴

林春常

石淵風浴新 知有詠歸人 能使箇心潔 臨流欲賽神

萬農の池

石淵の川と一河り弘仁帝御宇築く所ありて下流八十二景の内  
み加ふ金毘羅の町より一里なりて築くありてまう

十二景之内 萬農曲流

清波浮喬岑 長流早則霖 弘仁餘帝澤 一軟當千金

今昔物語

今むう後醍醐國那珂郡萬農池とて大なる池あり高野大師堂其國此人と  
いふれて人をもとめり築く池あり池のすむるに遠く地を  
高うりて池といふに海かきの中に見えり度ふかありて人の  
かすら見ゆらどればいひやとて池築くを後くまはてとて其  
國の人田をつくるに早魃の時とて此池とてなまらけれバ國の人とつて  
合りて文上よりその川かきとて池の水常にならばつて結るるあり  
大小の魚おびとてあり國の人のこれを取るる事とていふも池の中  
まはる魚満てはせざるに其國司任國ふありてゆり烟中乃

金二ノ十

滿農の池

象頭山八景 宿瑜

滿農池遊鶴

千代

池

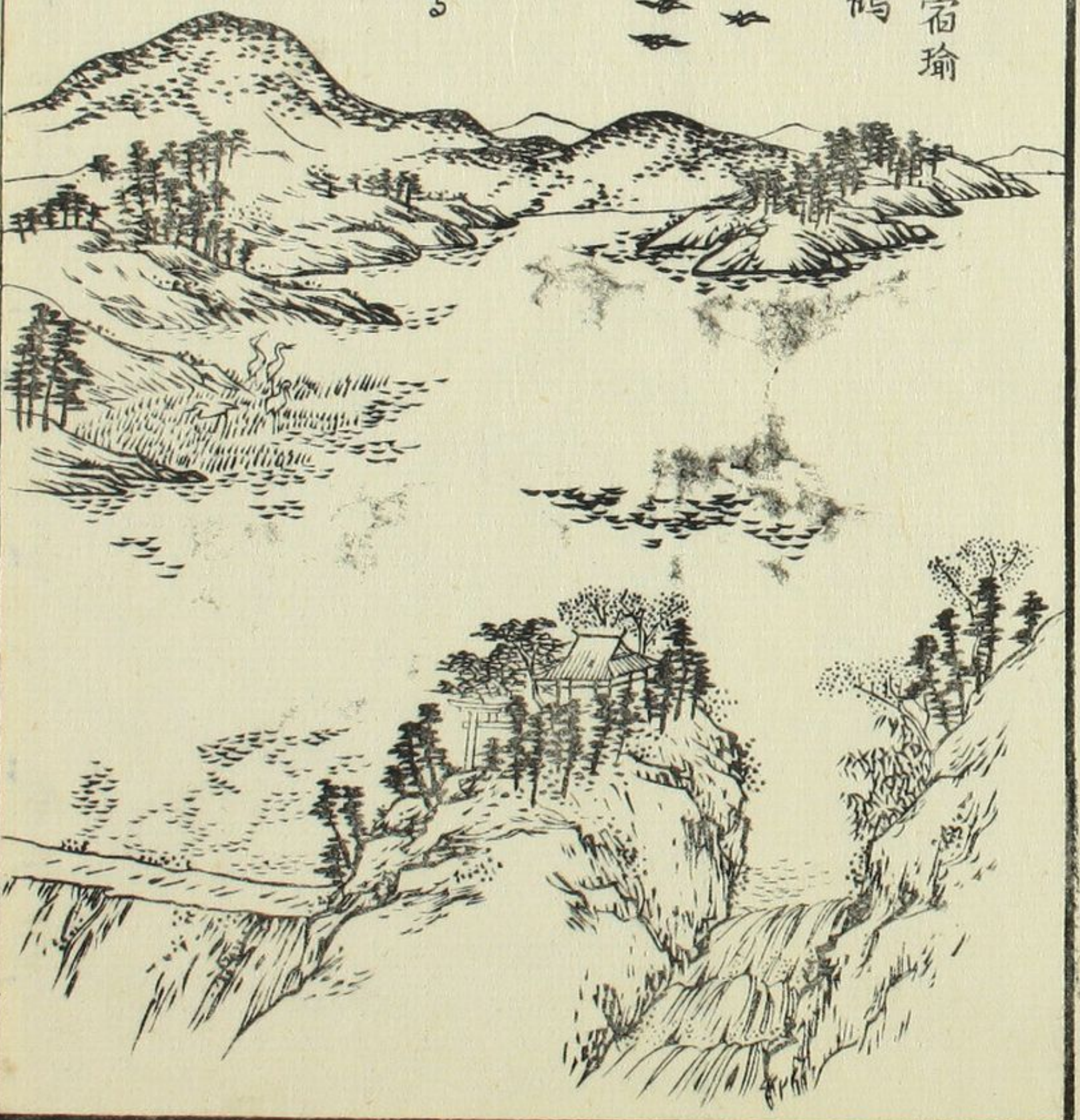
池

池

池

池

百里鏡光池水用  
千峰黛色入波摧  
鶴群忽自雲間下  
恰似傳書渡海來



打越坂

金毘羅より凡一里  
許賞の方あり

兼頭山八景

打越坂夕陽

資涯

旅人の

あゝ坂は

夕日くけ

つらやうと

くくゆゑん

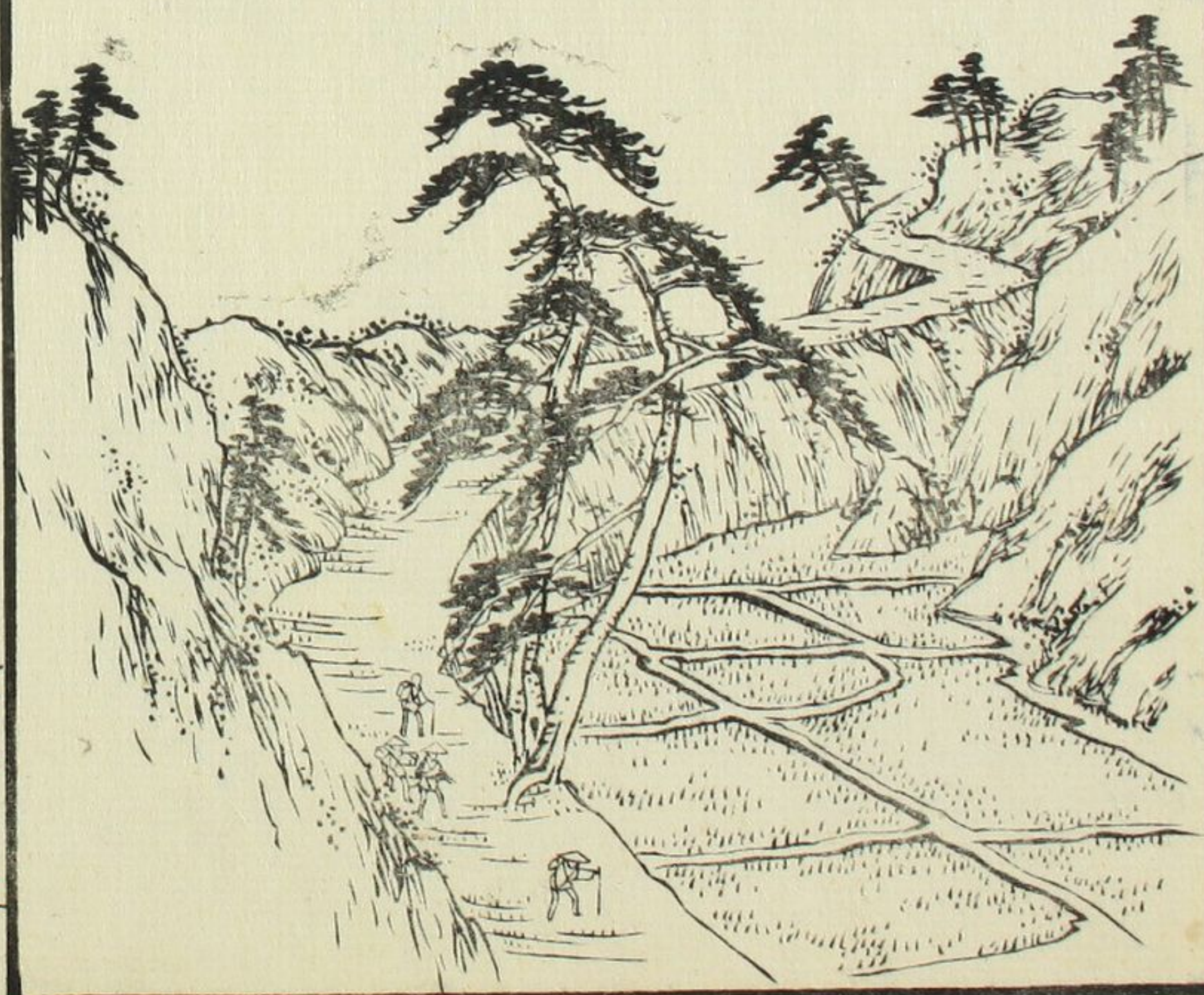
暢舟

踰阪豁然西望開

参差楼阁倚崔嵬

夕陽一抹翠微項

隱々鐘聲度水来



金二ノ十一

者ども飯よりつらくて物結ぶどりのほのそおあられ海農池ふかざりき  
く魚のここの鯉かよのうんとほくろを待つと岡をやりとひい  
して此池の魚をこくをやとあふ池をうねれば人にて網を置くと  
ゆゑ所於池の境は大方を定めて来て夫より水とりしておのゝ  
肝魚のへつと物どかまて取んとて斯ういふれば水も出るは  
がして其穴より魚の魚をりて敷るりもろく取てりりかして後  
ゆゑに水出るをわいつとて塞ぎた穴は才よりくわ  
らふと雨うて池より水も出る河に水も入りて池は後其の  
よりして優つたうらわ池の水國中に田島人衆とそんねわくの魚ハ  
流し出くわくこと人取れりかりて池の水をかうりあふ  
いれに池の水をかうりあふりて池の水をかうりあふりて  
池にいはいうとやんやんたれ権者の人をいれとて集れは池と矢  
いゝなうとやんやんたれ池の水をかうりあふりて池の水をか  
田島とていはいうとやんやんたれ池の水をかうりあふりて池  
いゝなうとやんやんたれ池の水をかうりあふりて池の水をか  
いゝなうとやんやんたれ池の水をかうりあふりて池の水をか

その池のほとりには今も昔もあんなに賑わうはなほあるや

斯有ハ後世修補して復今の如く成しものなるべし

満農の池神社 池の傍より二代守備曰く慶五年十月十四日戊午授漢臣國島

十市池 又取古市也 十市里 十市山 萬農の池の下流にあり

名寄 今も昔も成りたる池乃みづりなるべしもあつた人よ恋つ 為よ

内町 靴の西傍より飯の同いりたる在敷居町と云ふ河も家建あふ飯の傍に庚申堂あり

十二景之内 五百長市

半十長市生 高下巧成隣 無意弄烟景 沽諸待價人

一之飯 大はしり此の池のほとりなる名物の能賣店多し坊人家土産の需むるに愛宕

愛宕町 大坂の町に飯の町ありと云ふは此の町よりなりと云ふ見ゆると

鞠橋 此地の惣名と松尾との

故寺と松尾寺といひ又

此所よりともかく松尾

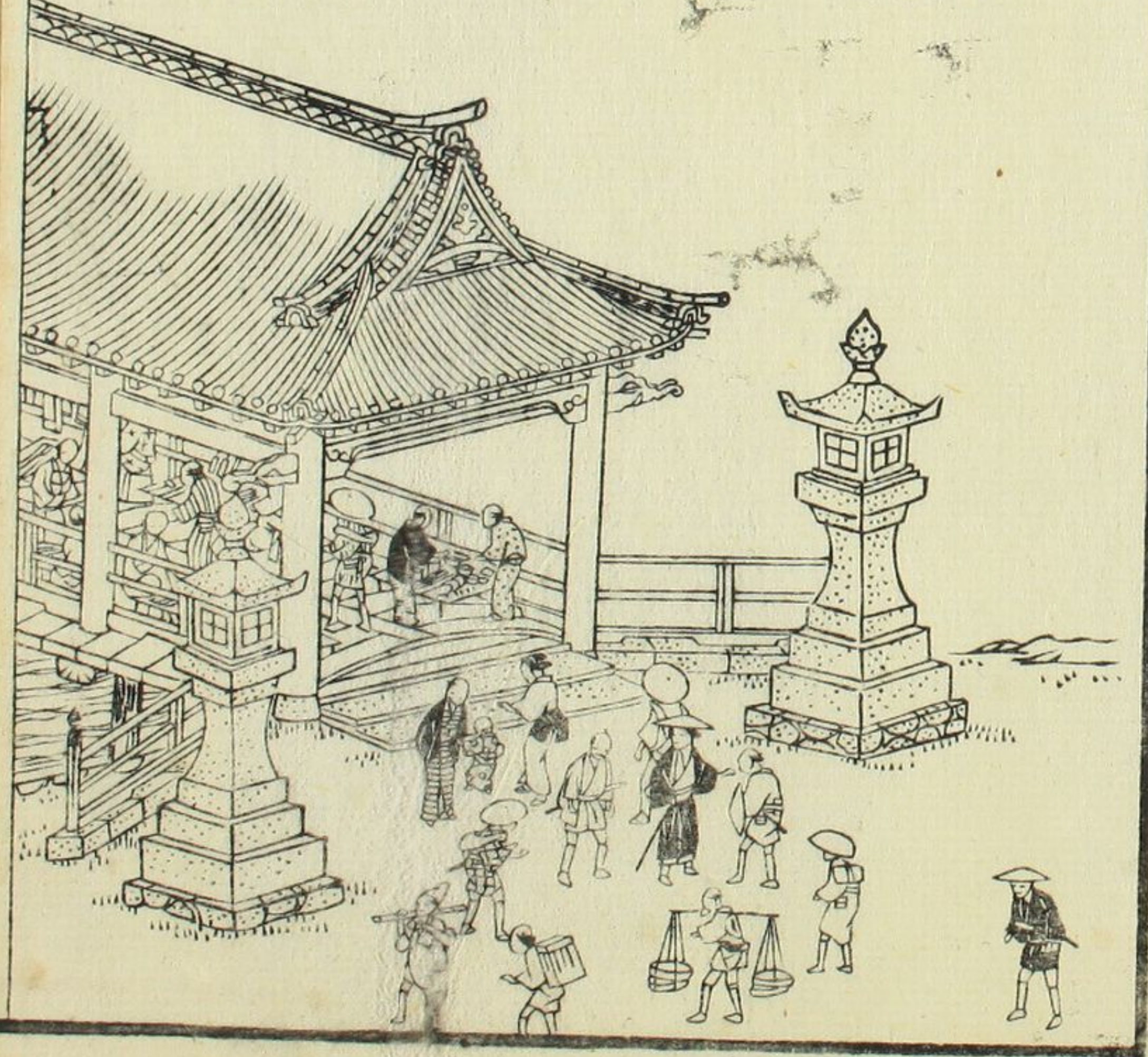
といふ又お寺と松尾を

かふる者多し能く龍

より御神号と祈の名とい

はこれ一と一と令毘羅と

いひありしせり



愛物の祈といふ

さやハ橋はな

つげくまあり

んせ乃橋ひ

候とん



天神社  
愛宕山  
箸洗池

愛宕の中央天満木自在天神相殿愛宕権現荒神水と祭る  
 正音あり  
 愛宕町より向うえゆる山の上の愛宕と大権現の社あり金毘羅山の守護神  
 十のふらして魔界より  
 愛宕の山中に日藏りて是の池ありと云ふ此水の清く早魁も清く  
 十月御神事いほゆる箸と云ふ御守と守護神あり  
 此池より流る阿州箸洗池の山谷より流るる水ありといふ  
 此の池の他は

十二景之内 箸洗清連

林春幸

一飽有餘清 波漣源口亨 漱流頻下箸 喚起子荊情  
 清少納言之墳 一の坂の上鼓樓の傍より 函年墳の辺に碑を建り

傳云 往昔室永の年間鼓樓造りて此墳を他に移しかんとす  
 函と云ふ人の名は清女の霊ありて告ぐる歌  
 うらむ跡のふらとたれはふらと下るれと有て  
 さて美し清女の墓ありとて木の傍に建てられり

清少納言古墳  
 捨石のむかへせむは流園  
 象頭山八景  
 清氏塚杖雨 依陀幾曲  
 侍雪中宮彼一時  
 空留孤塚象山陸  
 昔日無人買馬骨  
 于今秋雨為君悲

梅隱



清少納言二條院の皇后小侍一官女あり舎人親王の曾孫通雄始  
りて清原の姓を賜ふ通雄五世の孫清原元輔の女故に清字を以ては納  
言の官名なり長徳長保年間著述せし書籍に枕草紙と号す紫氏  
源氏物語と相並びて世に流行る老後に零落して元は又元輔が  
住一家の跡小住とて後四國一方向ももつとぞ

春曙抄云

去上法印百人一首抄云清少納言老後六四國の方に落づれとあり  
愚案とて一條院の御代の初め道隆公關白の御定子皇后の宮に立  
ぬし御威光もめでこころに清少納言もかの皇后の宮よりしらす  
さきて上臈の決まてやどらひ女侍の位にありし内侍もすべしと  
佐ちの更此草紙に見へり中関白殿遺蹟かられを拾ひて  
御足跡も中関白殿の御堂殿關白の御して上東門院内にて  
中宮たせめいかに後六伊周公隆家郷かと遠流のこころり皇



清女が霊夢  
和歌を以て  
其意趣以  
告る

皇后宮ハ女ミコ男ミコハジ生セぬハレト程ウケクモトモセ終ハ清原  
の淑景舎もちつぐれて失ぬれバ彼清方の人ハ時々ウツヒテ成出レ板  
あくらゆに清少納言もさるりまきくさあすまひふもさるり  
ゆひいあてとらう

同

古墳碑

古墳のわづらひにあり自然石の表と平一知文と鐫

清少納言塚碑

一條帝皇能大后上東門院丹奉仕例理之少納言廼君者清原元輔之女  
奈理祁利故宮中仁為天清少納言等序言鷄流此君伊吳竹之世乃人人  
迺八重雲隱利鳴神之音母動響爾聞知留事之如久村肝心風雅仁正久  
直久清久賢久副為豆歌讀事波其世仁類布人希丹書波唐士之母皇國  
之母落隈無久洩隈無久白銅鏡真清久見為明米天其道乎職止為成男  
子由理毛異仁物識理之手弱女仁古曾於是玉藻吉吾讚吉國成象頭山

止云山仁十引岩鎮理坐大御神乎拜祭金光院等云寺之時守之鼓打鳴  
樓之側仁此君迺與擲處也鷄理止石上古代欲利樛木迺言次來而在塚  
有祁理此哉名乎清少納言塚止奈母言奈流御代之号乎室永等言鶴間  
此高支屋乎將作登為氣流仁立民等找心母無久此塚能疊留若乎楚波  
夫羅志志乎其夜當利近久家居祁類人乃夢丹佳人來天 宇都都奈幾  
阿登迺志瑠肆表彗例仁寄波斗波禮自那連村安理天之母找難等云歌  
乎言且其塚乎然為鶴事之憤寸慨寸情矣告止見津止序此人之齋孫今  
波他處爾開花能授比去天任例村其人家素猶告茶屋止波言那利綾異  
寸鴨綾奇寸鴨故如此異寸奇寸事波更仁母不言右毛在左毛在上於所  
謂空數不凡在君之東柳處止之泉郎之於漆迺假丹毛言波阿夫佐夫可  
也母不治在可也母止此寺菟王僧 宥默大僧都此度燒太刀能利心梓

之弓腹振起互此塚之由縁矣本末淺芽原本曲仁書誌互如此碑乎立鶴

丹奈母 天保十年餘五年三月 高松藩士 友安三冬撰

普門院 右塚のむくふあり則ち坊中あり

二王門 一の坂の上より金剛神の兩尊と安ん象頭山の類ハ

櫻馬場 二王門と合した右様の並本忍さう吹春の頃には藏燬しくして其觀あり

真光院 萬福院 尊勝院 神護院 十二景の内つて左の橋陣と此の同右に龍村の鳥居あり

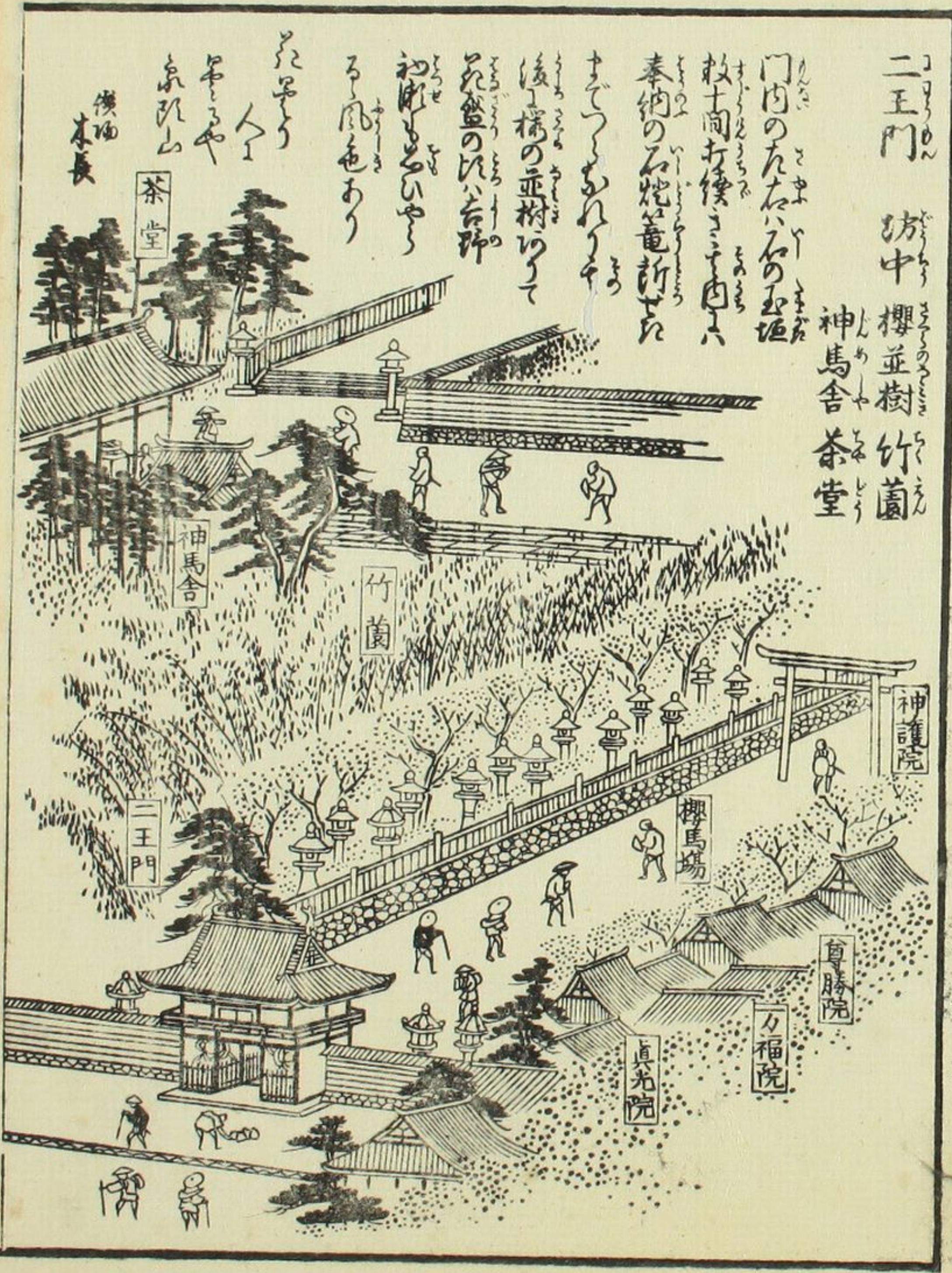
十二景之内 左の橋陣 林大夫高

吳隊二姬笑 鄴宮千騎粧 花顏誇國色 列對護春王

後前竹園 全

移得渭川畝 湘孫貽厥多 百千竿翠密 本末葉森羅

別業 坂とより右の方より本坊の別在り是の内つて出軒梅月と題に



二王門 坊中 櫻並樹 竹園 神馬舎 茶堂

門内の右に在るの石燈  
枚十間お供さす内ハ  
奉納の石燈並樹に  
すさつてお供さす  
後橋の並樹にて  
花籃のいさぎ  
初樹もいさぎ  
る風色あり

茶堂  
神馬舎  
二王門  
竹園  
神護院  
會勝院  
萬福院  
尊勝院  
真光院

象頭山松尾寺金光院

古儀真言宗  
初願所

社領三百餘石

本坊 御影堂 護摩堂

其餘院内ノ諸堂有之テ奉請ノ許ニ  
方丈の大門と云ハ西ノ大玄因右の方ニテ御守  
と受テテ護摩堂ノ御守と云ハ此ノ御守  
修法テテ御守と云ハ此ノ御守

神馬堂

本坊の御守の側ニテ當國の太守源頼重御守建テ  
神馬堂モ之の高サ通御守の御守

茶堂

神馬堂の側ニテ常棋待合ニテ茶室と想ハレ  
石階と云ハ此の方ニテ本坊表の御守

十二景之内 前池躍魚

林春舟

同隊泳其樂 自無香餌投 繞岩縱往所 活潑圍洋攸

愛宕山 遙拜所

道のたより向テ見テ愛宕松尾の拜所  
石階と云ハ此の方ニテ五智如来と安置

金二ノ十七

愛宕山

象頭山八景

春樹

愛宕峰朧月

この月ハ此の  
いむし  
わさね  
うひ  
とも

愛宕山頭集宿鴨  
隣看初月掛林斜  
後今願學如恒影  
更使詩思夜々加

象岳



萬燈堂

寶塔の辺にあり本尊大日如來と安ん常地明なり

大罽口

萬燈堂の椽より徑凡四尺余厚二尺余重大く掛りて然るが故に廿廿放りて  
室曆五乙亥年三月吉日 阿州木食義清ト記レ

古帳菴之碑

萬燈堂の前あり天保十四年癸卯春正月建る所なり

石表

の 是れと云ふは乃と云ふは  
折もつらうも文しつらうも  
紅小細町  
古帳菴

同裏

天竺川くさりのくさりがききき  
あさううわがが利益やきの  
古帳女  
龍眠書

次細文の畧也

此邊より見渡は景色とて

十二号之内 群嶺ねき

林夫 齊

尋常青蓋頌 項刻玉龍横 搏鶴失其色 滿山白髮生

全 幽軒松月

是八軒お紀や 別業の事あり

起指露光開 塵省疎影回 高低同一色 知否有香來

二天門

長曾我部宮内少輔元親の姓は秦氏として信濃守國親の子なり廿二始祖  
百濟國より後まゝ人として鎌足の大兄や近侍一信州におきて米地と賜り秦  
に姓を秦とせしむるは小應永の頃十七代の後流秦の元勝土佐の國  
仁村郷に鎮至江村備後守是と養子として長岡の郡曾我部小坂と築て入るこ  
剛と在名として氏を曾我部と改めり終つる小同國香美郡も曾我部と  
り所あつて領主として曾我部の何某と云りて各郡名の頭字と添へ長  
曾我部 永曾我部 とも号しりる元親生質剛毅勇力比倫と絶し 東葉と  
松ち干戈と執り到る所武名あり遂に土佐と鎮し 南海と吞食し 後秀  
吉と降参して土佐一州と賜ふ 數度の軍ありて天正十六年任友として  
四品土佐侍候秦元親と稱れ

鐘樓

二天門の内法の側あり 是れと云ふは國守生駒氏の所寄あり  
十二号の内雲梯の供養と稱れ

十二景角 雲林浩鐘

近似萬車轟遠如小磬鳴 風使朝手晚 雲樹亦含声  
本地堂 樹樓より少くおる石の鳥井より下を石橋ありと懸て西

本尊 不動明王

石階

本社正面通両側石燈籠許あり

行者堂

石階中間右の方より後優婆塞神堂大菩薩と安置

大行司相

當山の守護神也 毘沙門天摩利支天相殿の社あり

金銅鳥居

石階の中るにあり則本社の正面なり

御本社

東向藤より九丁山の石殿あり

金毘羅大権現

祭神未詳 或云之輪大明神又素盞鳥尊  
又金山彦神ト云

舊事紀

伊弉冉尊神避之時悶熱懊惱因爲吐此化爲神名曰金山彦神

次金山姫神ト云

拜殿

下ニ通行の石あり縮人これ通て致回拜は右の方石の玉垣の四角  
地を以て拜殿の沖は石の足傍中に見えり此より終るりてなりや  
たのめらるるに番所あり周帳と稱す人番所より内陣より金幣と出され  
項をせらる本用帳料銀十二を本用帳と云ふ此の裏谷より一景の内なり

十二景角 裏谷遊廊

林麿樵子唱 山对五川眠 凹處足音少 吻々塵々連

三十番神社

本社のたの方石階の上階の内なり右にあり此を本社の内陣

経藏

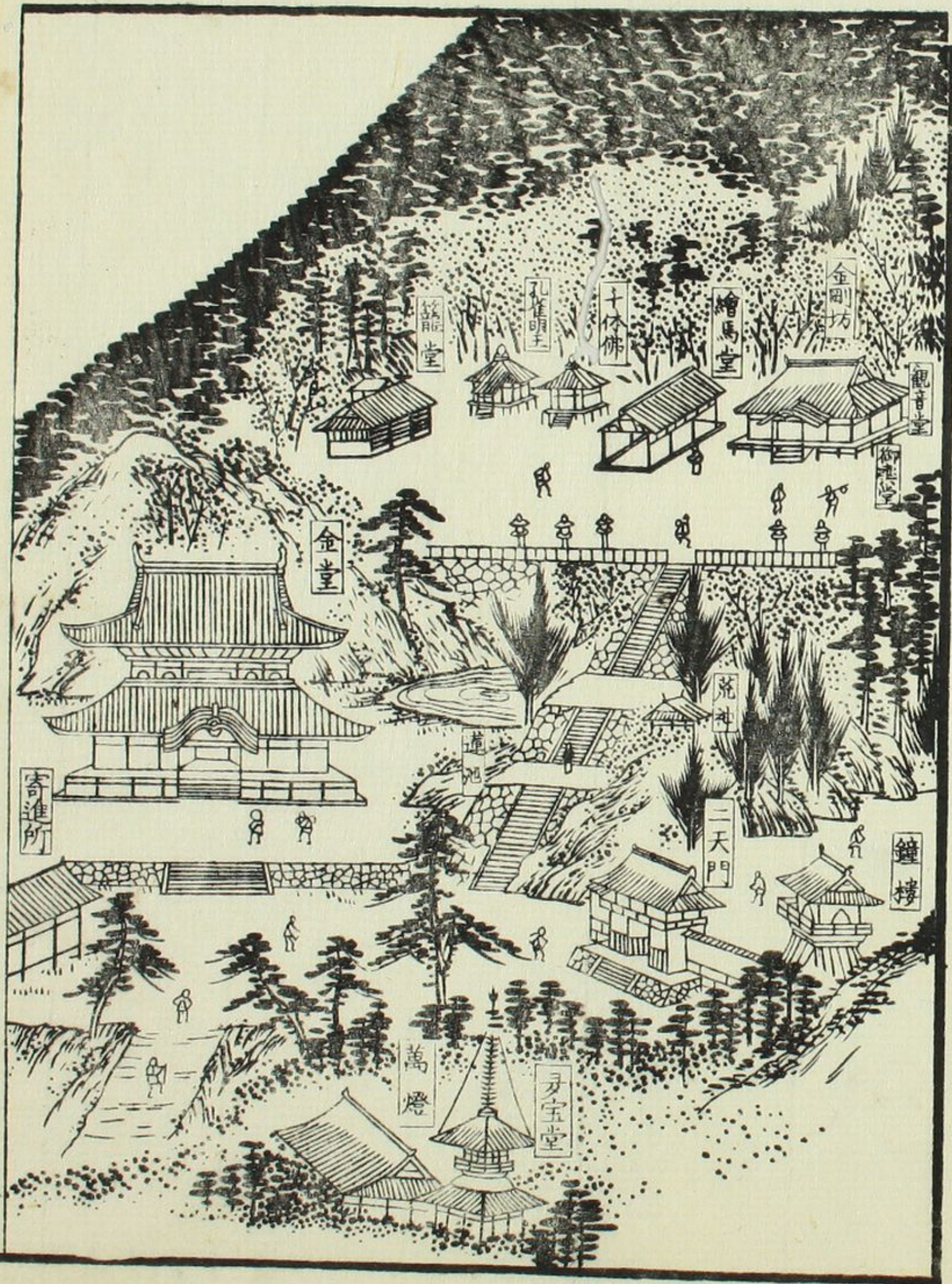
右の拜殿に並ぶ大守源頼重郷御寄附して大明板の一切経あり  
釈迦文珠普賢十六羅漢十大弟子并博太子普成普建と安置

紫銅碑

経藏の傍より上ノ寶藏式覽之記ト鐫以下小細文の銘を畧之  
寛文壬寅二月日記と下りてあり後刻不出

観音堂

経藏より石階とあり下りて右の方より馬に乗りて観音ありて  
観音と云ふ本社に観音と云ふ觀音ありて通称と云ふなり



象頭山御本社

二王門内より御本社の寶前へかけ  
 国守とくろめ諸侯方よりの御宗附の梵  
 騷一室銅あり石のつらねも御家紋の金  
 龜のつらねの蘇と良工数くもとせり



本尊 正觀世音菩薩

弘法大師真作

前立 十一面觀世音菩薩

古作也 左右三十三軀の尊像あり

狩野古法眼元信 馬の画奉額

堂内わの服格子の内ふあり

土佐守藤原光信

祇園會の圖奉額

同所並ぶ

後堂

金剛坊尊師の靈像と安ん

長二尺五寸許 庵中縁繋ぎと山伏の姿あり 縁とけりや西を飾りし云

則此金剛坊と号する凡二百余年以前當山の院主宮盛信一といひ傳  
いり権臣奇傑として俄後當山の守護神となり終つて女始に本尊の脇に並べ  
安置せし崇まき衆徒あまき是を何れ尊靈の回我る山と守護すれば山乃  
方と向ふは是れはつて今のごとく後堂に安んたり先年二百八十年のを  
忌むつてつらう法式修りつので諸人々縁とおせむるの日の間僅か三  
つに南麻痺れ忽ち晴天を曇り雷雨をびり閉居あれは又白くえのいどぞ

繪馬堂

觀音堂南の殿にあり願成就の奉額と許多かる難風の危舟漂流の圖天  
物の面かとの額別としてあり 傍に奉徳の紫繩の馬あり



拜殿の傍ある玉垣乃  
迎へ北の方と眺望と  
き海上のあし浦に那  
くすて一をこえんや  
松津深波の富士とぞす  
る飯の山とくもれを  
橋足津八栗五柳はな  
の足清まてんて絶景  
いふとくか夕陽の  
ころこへり  
陸祐  
夕日されば浪の上より  
三三三  
いづる浦に  
りねやらん

阿弥陀堂

繪馬堂の傍あり千体佛と安置し 太守頼重郷の御建立なり

孔雀明王堂

阿弥陀堂と並ぶ佛母大孔雀明王と安置し

籠所

孔雀堂の傍あり系籠の請人より通夜し 神興堂 観音堂の前あり

観音阪

石階あり 荒神社 坂の傍あり 蓮池 観音堂の南の方より御神堂の着せ池小捨るより

金堂

観音阪の下方あり境内中第一の結構莊嚴なりとも羨無かり

本尊 薬師瑠璃光如来

智燈大師の御作

此所にて智燈大師七佛薬師の法を修し給ひし

例祭二月六月十月と三箇度あり推中十月當山第一の會式にて十日

十一日御神事より八月廿日より儀式始り毎年頭人より者二人づき

前年より是を決し九月八月湯川の神更とて別當金光院女改人と召連れ

石園小を御修法に夫より頭人存所と造りて是小居りめ大と改り

禰の病と同日四足及び川魚又海魚の肉海種蟹もと令せび最も

房事と禁ぶるも甚く敬重に情し十月の御神更と勤む此間熱田女神

とて老女より顔人女抱れも右段人當所小ねの庄苗田榎井四

条五條ホ出村小敷代相續く其家系の者ありて是と勤む十月十日神雲

を振奉るも他の神更かりし御靈より言えもしく神雲堂よりかれ出せ

し観音堂とて面わらまあり是と行書よりし夫より觀音堂小

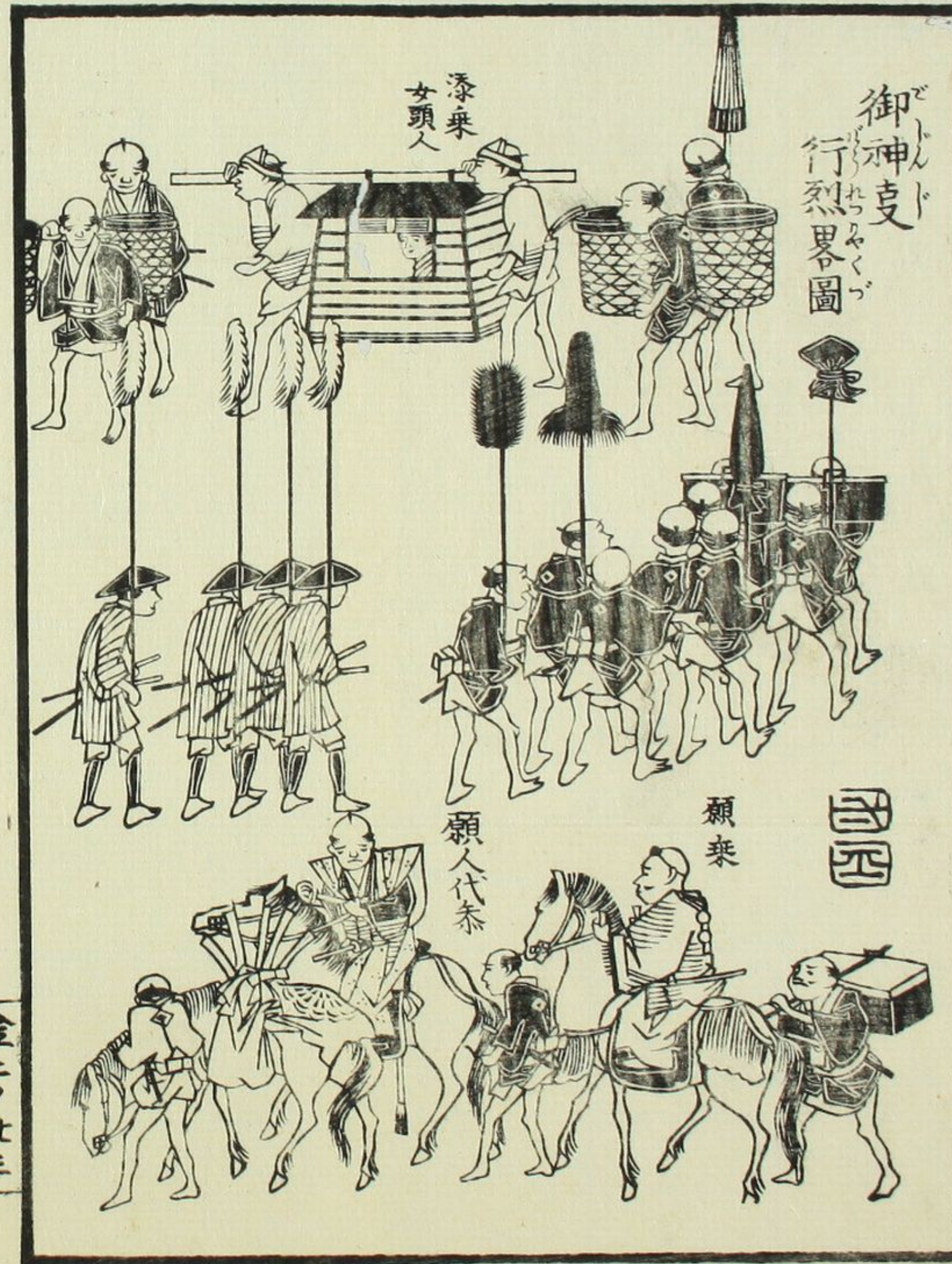
神雲とす神役より西頭入江家の僧此と人と實は木おと膳子より

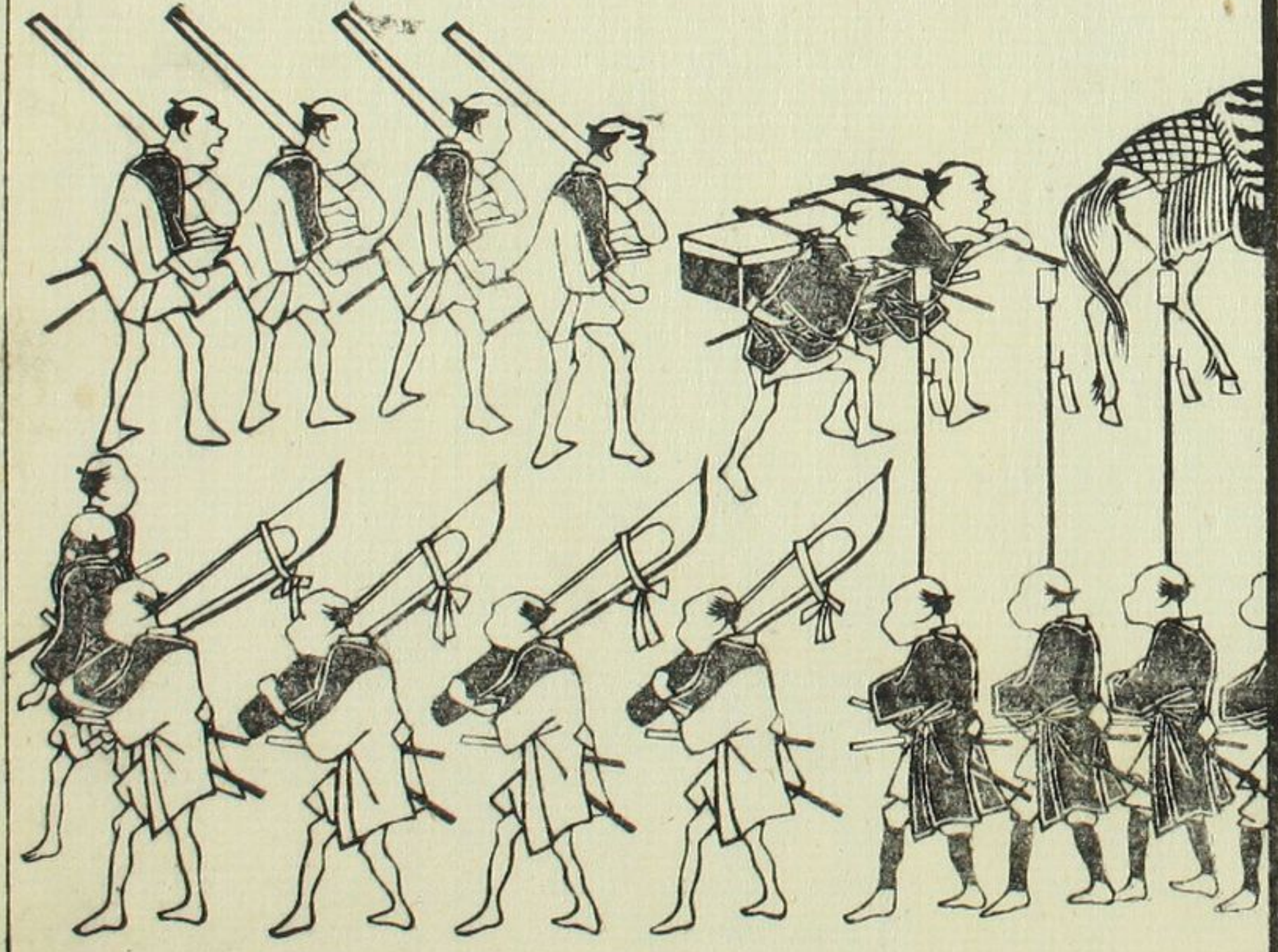
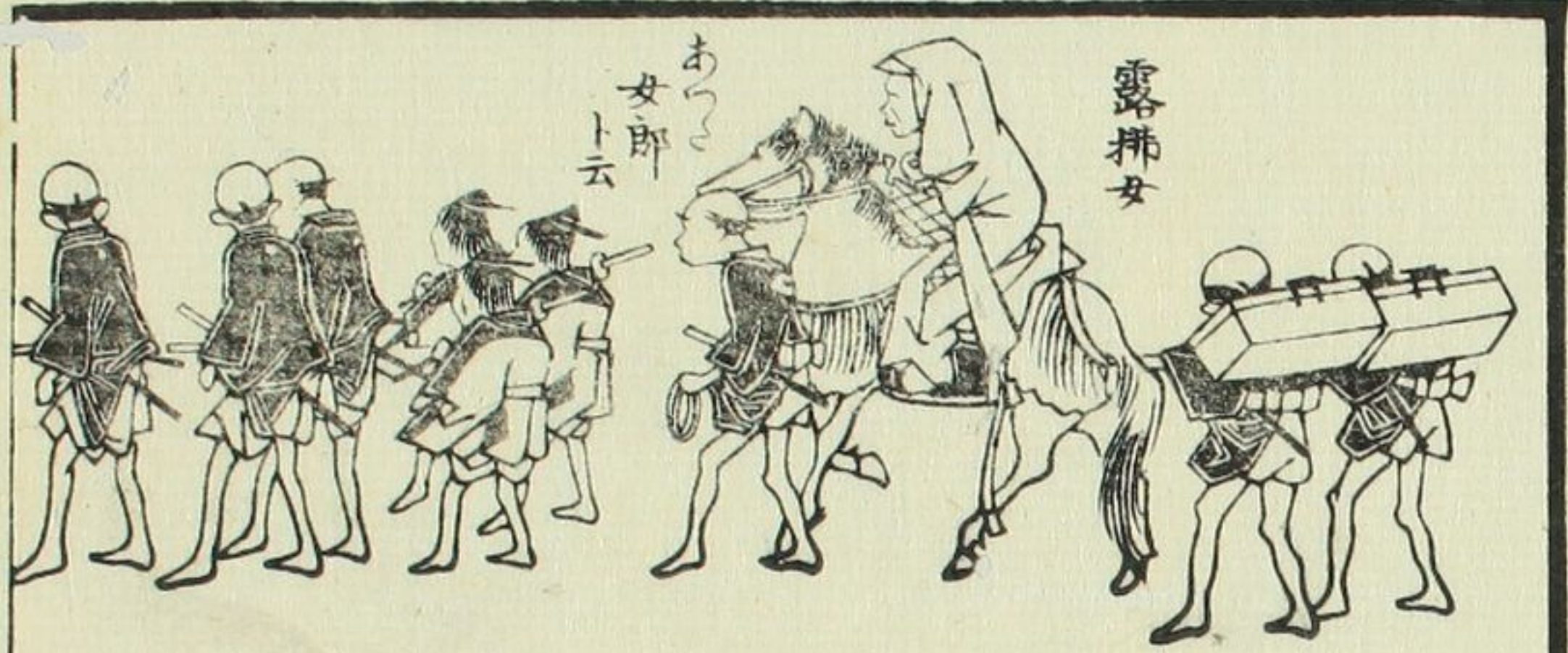
の式より後此膳具とて堂の操より庭におもすて著は蓮池とて

是神喜の終り御神事終る諸人皆下山して春詣人勿編寺中乃

僧俗も小廿夜二人も登山せび又此著とひく幸後ありて御皇朝志

く春結して標のむれも捨りや膳具かりもや著は其夜に





金二ノ卅四

阿洲の着倉谷守護神の運び給ふ言傳ふ則山中の寺院着倉寺  
 へ例奉の通り御着るこひも有之の使者来る此言いつる神傳  
 へや往古より毎奉斯のじに實に奇妙の御神夏有難言ども當  
 山不請と夏と制むるま中のみ此一夜限る其言登夜も素  
 圓断り佐作の軍八蟹川魚海嶺蒜ふと林食とこり  
 夫當山と象頭心と号する夏遠望より山の形勢象の臥のわらうゆに  
 名をの寺と松尾寺金光院と号し佛塔寶鏡と輪奐と實に國中乃  
 壯觀遐述の企望とる所らう折権現此鎮座の奉代さるるのみ神  
 代りたり其初め幾千歳と言ふことわら然もども金毘羅といふ  
 名佛經小出所され其神号と縁とる夏佛教皇朝不後まの後のん  
 和國神名帳に見へ金毘羅林語とて此は孔といひ或は黄色と翻し金光院勝

金二ノ元也

王經此神名り最勝王經流布の國と守護一統法者と擁護給んの本誓  
 又一説小天竺示象の金毘羅神の長所なり又曰釈尊出世の時佛法と守護の  
 為ると天竺に出現し給ふ則ち修羅所謂者閻嶺山の金毘羅神是なり釈  
 尊入滅の後舍利とて此地へ後へ給ふ又説之輪明神清浄権現新羅明神同  
 神の異名あり或は素戔嗚尊とて之國流轉して佛法と守護し給ふ震  
 旦武塔天神午頭天王と号し天竺とて摩訶羅神といふ雲石阿闍梨白我  
 岡大物主命天竺といふ中して彼土とて金毘羅といひとて傳教大師神  
 域に通し金毘羅輪一輪と釈し給ふと何れ經の中み演ずる釈尊に授  
 婆大盤石を授け時神手とて石とて修六此神なり即祇園精舍に  
 鎮守し給ふものなり尚権現の靈巖奇怪の夏言語の乃所あり  
 権現の御真跡本社の上の方巖窟あり其中すまはるるが宮武の

御崇敬し... 御朱印地... 魚鱗奉幣...  
 日本一社の靈神あり一説小寺と金光院といふ昔武天皇天平十二年  
 二月の詔天下の諸州四天王の像と安ん金光明最勝王經と寫して州々に納  
 り毎月八日最勝王經と續續せしめ齊日小殺生と禁し僧寺と金光明四天  
 王護國之寺と号し是佛法王法も天地と永久の...  
 故に疑ふらく其時の寺号は略せん... 此山峰高き谷深き毒水雲水絶  
 勝し其時の風景美觀あり十二景八景小此待歌六前小著凡

二日月の牙と出はや... 無村  
 赤と... 月居  
 好し月の圓... 寄閑  
 煉る乃痴と押空や... 谷嶺

金二ノ卅六

金毘羅諸方道法

北東の方  
 善通寺 凡五里 弥谷 凡五里  
 多度津 凡五里 白濱 凡五里  
 丸龜 凡五里 鶴足津 凡四里  
 白峰 凡六里 佛生山 凡五里  
 高松 凡八里 志度 凡十里  
 八嶋 凡九里 八栗 凡十里  
 西南の方  
 観音寺 凡五里 仁尾浦 凡五里  
 小松尾寺 凡七里 雲辺寺 凡十里  
 植田乃松 凡五里  
 かすむ見や...  
 三石鐘  
 一行





大麻神社

千首 大ぬさ社

あつねを  
たいしう神も  
へんせきも  
解差

郡度

金毘羅斎齋悉く終つて善通寺に齋齋せんと欲ふ小鞆橋の西詰を

北へ往るは是より行程二里半あり

興泉寺 往還より遙く東を見ゆる近世八景の内小加

八景之内 興泉寺鳴鐘

梅村

興入林鬱蒼邑閑羣鴉爭宿各飛還蒲窳聲吼興泉寺錫杖僧歸松尾山

阿比のいづかののたふ小音すむらびつとけす此へありは後一執

大麻神社

大麻村の向う是則ち善通寺への街道あり

祭神一座 天太王命 延喜式神名帳に出度郡二座之内也

二代實録云貞觀六年十月讚岐国授大麻神從五位上

榊盤開戸尊 豐盤開戸尊 隨身門の左右に祭る

此二神の侍りて古作ありつとも通例の形勢を異うて立給うて其彫刻古色絶妙之  
が高麗物一村同様に彫り見ゆしとれ古作あり社首は古の傳り形勢のまゝ  
のりあり一々富國に此像を立像とん及り

大麻神社隨身門 古作兩神像 長凡四尺許

今世一昔彫刻する隨身の形像ハ林中近衛の次將の

帝王と云々

宣室の神靈也。

神社ハ然るべし

神代の尊と鎮座

奉る神社ハおの

撰盤同ク豊盤同ク

崇め申スハ當社の神像の

これとて殿殊勝として

尊く思ひ



古来の形に橋架して居る人々ハ此を橋の形也  
らりも是レ今世の形也と云ふ事ありては

金二ノ八

五岳山誕生院善通寺

善通寺村あり國遍礼七十五番の札所あり

本尊 薬師瑠璃光如来

私法大師作 座像長一丈六尺 金堂ニ安置

五重大塔

金堂の前より先年焼亡 鐘樓 大塔の右の 鼓樓 大塔の左の

常行堂

鼓樓の東 觀喜天祠 鼓樓の前あり 五社明神社 大塔の右の東

天神社

金堂の左の 經藏 金堂の右の 善女龍王社 金堂の後池の中

南大門

金堂の正面あり 法然聖人塔 南大門の内東 足利尊氏郷塔 法然聖人の

楠大樹

南大門の内西の傍ニ本あり 實ニ希代の大樹なり

觀智院

金堂の前大師堂より道條の左あり 花成坊 同左の傍あり

院主坊

當山の坊中より寺内觀音堂あり 花成坊あり 寺中ノ薬師堂あり

眞院御影堂

私法大師 御影堂の左の傍あり 十五堂 同左の傍あり

茶堂

十五堂の並ぶ 鐘樓 十五堂の前より 二玉門 大師堂の正面東より向ふ門外ニ石橋



三門  
真の院



神人樹

基師堂

院主坊

花成坊

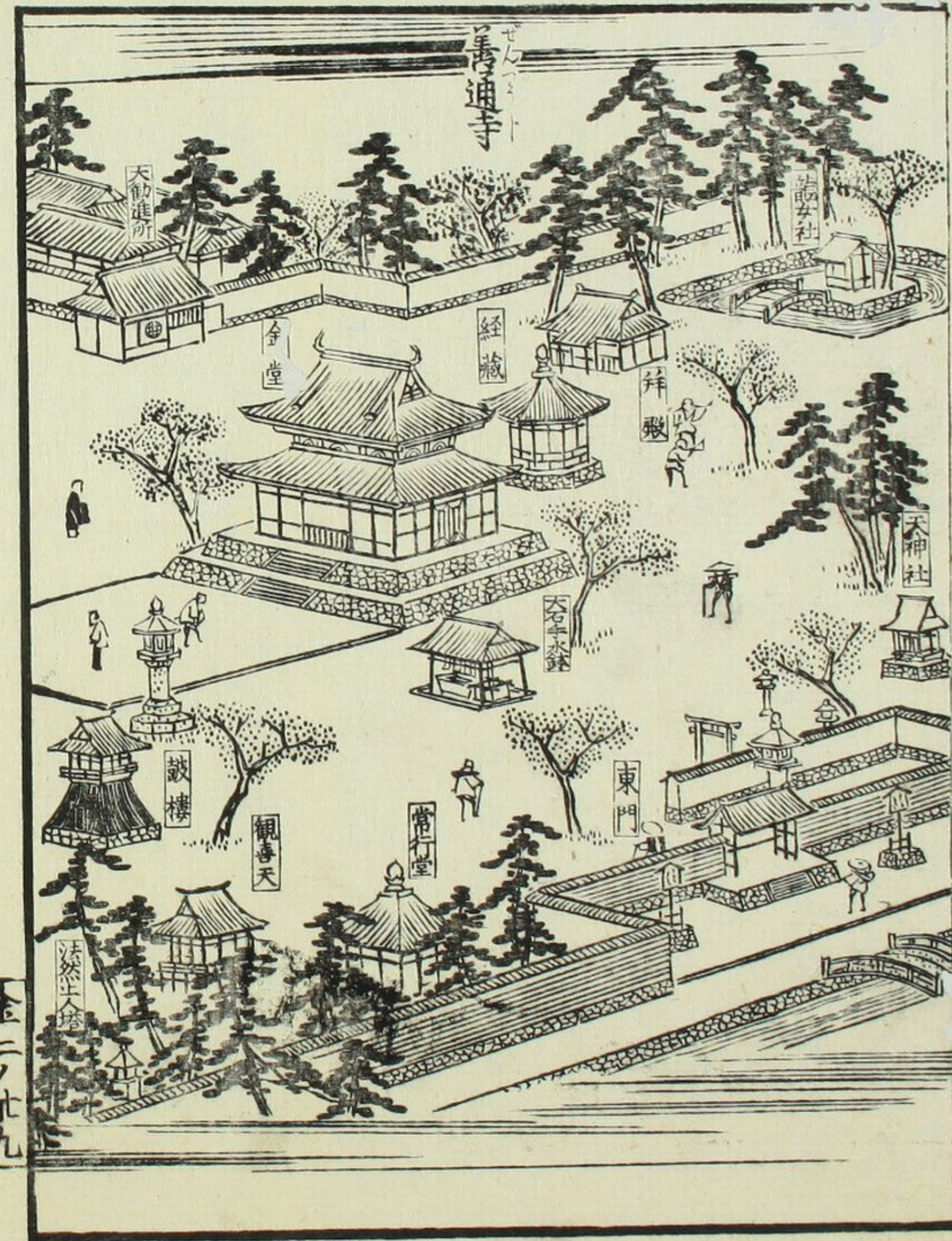
五社明神

五重塔

手水

南大門

會式坊



善通寺

天動進所

金堂

経藏

拜殿

大神社

六角堂

鼓樓

觀喜天

常行堂

東門

法然土塔

金三ノ丸九

護摩堂

御影堂の御影池 本坊の向きあり池の傍にあり大師入唐の時母公

御成門

池の傍にあり 本坊 護摩堂並に方丈客殿庫裡宝庫土蔵諸役

邀月亭

本坊の南裏門の傍にあり月見亭あり

當寺ハ往昔弘法大師誕生の地にて父佑伯善通聖世の家園なり母阿の

氏の人なり大師此兩親に託して此地に降誕し給ふ故に幼稚を在りし時

遊びのいふ所も今も残さる諸唐求法の後此地を以て寺とて父母祖先

の追善具を永世人民の福田と擬し行りり則ち又善通の功徳を取て善通

寺と号し誕生の地なる故に誕生院と稱し將五岳山と号するは後五

山ありて則ち五佛の峯なりと香色山と筆山と我拜師山四と中山

五と火上山といふ五峯時つ禁断なる故に号し就中我拜師山六釈迦如来

出現の高峰なる故に釈迦山と稱し南に普賢菩薩の山ありて象頭山

号し北に文珠大士の山ありて獅子山といふ中五佛の山と普賢文珠

の因遠に給ふ種いり然し形と現在に在り大師之教指歸は白王涼軒歸之

嶋椽障蔽日之浦といふ即ち此地の莫ふところを往古の伽藍に唐土の青

龍寺と撰し給ふ言傳を道範阿闍梨の紀大伽藍とて夏と詳著せり

山家集 大師のうまれさせのいなきところをわづらひしりて其まゝなり

ねはたてりるを以て

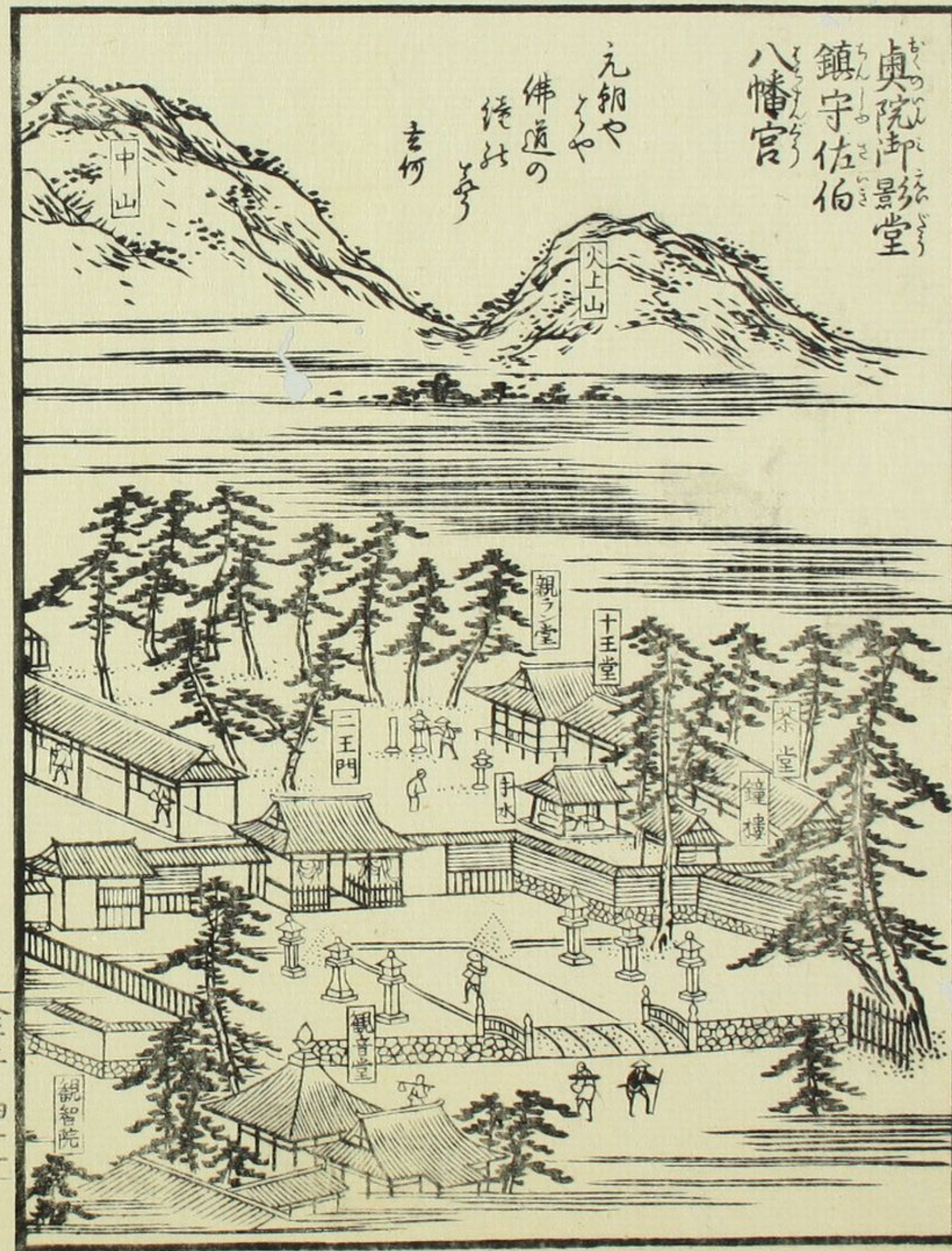
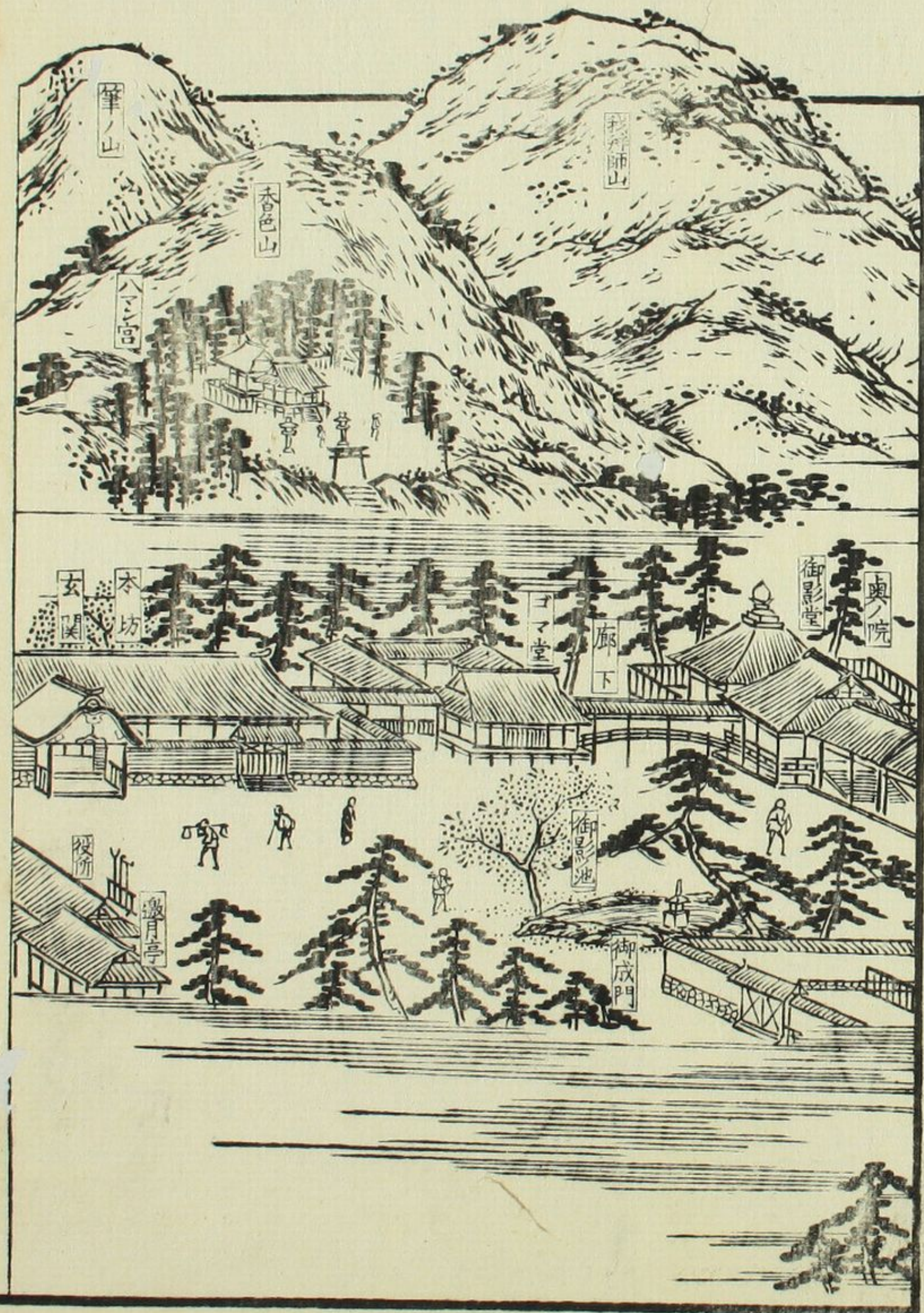
つらまゝなり同ト野山なる本の初なるをいふなり西に

北にせくつら井の水はつらむらむらんとおもむく月の中 全

道範阿闍梨の記に其所なるをいふく度くをいふ今も如法経に納め七重の

石塔ありと道範師の言に 高野山名の室をすすむ月はけふのこころ告ぐらうらうて

右の道範の頃まで其首の伽藍あり由らば後年移りかゝりし今



大師堂かの誕生まゝせし古蹟の所は作まらざり  
 又西の紀に大師の御年ふもむし海に四の門の額ありこれ大師  
 の遠流に侍りたる末の世に如何なる人かんとて東に覺  
 侍りし有道の時に二牧りて善通之寺と書せりこれあり  
 此道範阿闍梨といふ高僧の住せり大徳に治四年の春不慮  
 る不測の難と事多かりて此國に配流せられ幸ひ大師の遺跡と慕敬と  
 寛元二年九月より當寺に移住ありて此寺を製作の書指木とて  
 其兼元の始り法然上人も此國に流るる時大師の遺蹟と拜せん言  
 悦むるを以て西の上人千脚のしに安の年間法然上人配流兼元元年其後道  
 範上人配流に治四年九此間年曆七十有餘年一及び  
 靈場記曰  
 真雅僧兵大師の御胞弟とて原東此所より出りて故此寺に住せり  
 其の論之其後遍照院の僧正寛朝延命院元泉小野の海宥範有源者

快水の高德達住居せりト云  
 往昔より宮武の御崇敬代儀に於て論旨院宣二千金通項戴一且  
 將軍家御寄附之状亦數尋ありて在田多かりて禪講の精衆林と  
 勅會の法事亦有りし所也尚靈宝什物品月々變りて其畏之  
 東鑑安貞二年戊子三月十二日之條  
 今日被停止讚岐國善通寺領之地頭職畢是弘法大師御誕生  
 之地長日不退御祈禱之砌也本佛則大師御自作釈迦藥師像  
 云云而近年被補地頭於彼領之間寺用闕如之旨依捧歎状殊  
 有甚沙汰被止之云云  
 傳云往昔陰陽の博士安部清明其の縁りて當國に下向の時夜道とゆ  
 程に相俱して使鬼神火の燈とて善通寺の前とす時火と打消て

使鬼神善通寺の  
額を必きて道と  
変る



往方と云ふは然らずと寺と過く後出来き清明の寺其故は阿含使鬼  
神のて此寺の額を天王寺授給ふが故と必きとあつて道と變ると言  
ふもいふは是る人所謂大師の筆より書せ給ひ額ありと  
抑ふ法大師當尋度郡屏風浦依伯の直南を子より母河川の仕官女  
夢に林僧懐小と見てとるは姓十二月と経て先に帝室を極五年二月  
望月生きの小名を貴物と号し類敏甚と世に異して神童と稱し幼ふ  
して六經史傳に通し石剎寺の沙門勤操に從て虚空藏求同持の法に授  
くる是利髮法衣の法も成ざる前より二十歳して勤操就て落髮し  
沙門の十戒を受けし論と委し研究は法衣と教海と稱し後自ら改め  
て如堂と号し其後延暦十四年東大寺の戒壇に登りて且是戒を受け又  
空海と更む同廿二年夏求法の為遣唐使に隨つて入唐し給ふ彼より

て徳宗皇帝貞元七年青龍寺の慧果阿闍梨觀慧果の曰く汝  
 此來る何ぞ晚きや我相待りて已久し今と命とより西都の秘傳に附  
 一法器を授け雷學するること三年して敏朝の時二年二十二年唐土元和中  
 年和朝とて大同元丙戌年より帝と始りて神殿上人の空海と尊しり  
 時二論の名通る道昌唯識の碩學より源仁華嚴の誓ある道雄天台  
 小隱も圓澄も争ひの旗を捲き降泰りたりとぞ弘仁七年紀州高  
 野山に金剛峯寺と草創し同十一年帝宸翰して傳燈大法師位の紀と  
 賜ふ同十四年東寺と賜て灌頂院と建らる天長元年天下大旱以空  
 海勅と奉りて神泉苑に清雨の法と修し勿地に應驗あり同二年  
 高雄山と賜る養和二年二月廿二日年六十二歳して高野山に入定  
 給ふ其後延喜二十一年冬十月弘法大師と謚と賜る

往吉地へ海して前より五峯屏風のくく海よらうくく後  
 岡浦くくくく今一圓陸地くく其敷とくくくも名残り  
 くあり言傳えり

鎮守八幡宮

後の山あり依り依の八幡宮より大師の兩親と祭りの山形を

獨鉢水

後の山の林下よりくくく井ありとくくく水くくく清きなり  
 大師独鉢よりつて穿ちたる山形とぞ

御手洗水

十丁より山の方より山ありとくくく湧出り

土俗曰往古大師當寺の本尊と作らるる當山の土を以て此水と和して給  
 くと故に始り土佛ありと後依りかくそのくく今此水靈驗あり  
 て諸病を治す速くかまゆ人ありとて治るは常り甚しきとぞ

八十八箇所之石佛

香色山の山中より四圍靈場の本尊と石像と造りて所

西護荒神祠

右同山中より西方守護の荒神と觀瀆に

南護荒神祠 南大門の南西の傍より南方の守護あり  
 東護荒神祠 東門の外石橋の傍より東方の守護あり  
 北護荒神祠 在中の北より北方守護の荒神なり  
 六地藏堂 東門の東丸龜街道の傍に南側より

金田比羅泰請名所圖會卷之二畢

